
子連れステュワードの縁由

ことわりめぐむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子連れステユワードの縁由

【Nコード】

N3851W

【作者名】

ことわりめぐむ

【あらすじ】

事故で母を、病気で父を失い、生活環境まで変わらざるをえなかった事から困ってるだろうと、王子に思い込まれたローレンは、本人の意思は尊重されずに屋敷の執事として雇用される。華やかでない業務を大した問題もなくこなすそんなある日、夜間見回りの際に幼い少女を見つけ、保護者になる羽目に。なぜ彼女はそこにいたのか、そして命を狙われるのか…。

そんな事よりも、今回は展開上ファンタジー要素がちゃんと書けるのか。ジャンルが怪しいお話です。『北のまちに降る雪』の続編

となりますが、先の内容を知らなくても問題は無いです。

1 (前書き)

この作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体・事件とは一切関係ありません。

作中にメインで出てくる国名と人物は全く架空のものであり、実在はしていません。作品の世界観上、一部実在する国や文化を引用していますが、話の内容は完全なフィクションです。

因みに「北のまちに降る雪」の数年後の設定となっておりますが、前作品を読まなくても問題なく読んで頂けると思います。

庭の片隅では、とても小さな女の子が座り込んでいた。

賊や敵国の間者かとビクビクしながら向かってきたため、口元に笑みが浮かぶ。男がそんな弱気でどうするのだと屋敷の主には馬鹿にされるかも知れないが、仕方がない、彼には戦うすべがないのだから。

幼女の年齢の違いはローレンにはよく分からなかったが、おそらく五歳から七歳程度と推定する。彼女は、とても長い金色の髪で隠れてはいたが、衣服を何も身に着けていなかった。

幼いことから恥ずかしいとは感じていないかもしれないが、歳はかなり離れているとはいえ、ローレンとダヴィード、二人の男の目前に全裸のままでは彼女が可哀そうだと考え、上着を彼女にかける彼のフロックコートでは丈が長すぎるため、上着のせいで歩行困難になるだろうと考たローレンは彼女を抱き上げた。

その間、少女は抵抗もせず、何も語らずこちらを見つめていた。

「どうした、僕の顔に何かついてるか」

ローレンの顔をずっと見つめていた彼女の視線があまり嬉しくなくて尋ねると、かわいらしく小首をかしげる。

「もしかして、ぼっちゃんの隠し子だったりして、『パパ』とか思ってるんじゃないの」

冷かすように舌を出してダヴィードが言つと、彼女は気がついたかのように「パパア」と言って抱きついてきた。

「な　なんでだ!!」

「ばばあ?」

言葉にはしていたが、予想に反した言葉に、ダヴィードが驚きの声を漏らす。

「違う、違う。断じて違う」

そんな彼の視線に否定をするが、何の説得力も無い。無邪気な子

供が「パパ」と言つて抱きついているのだ。どこのだれが見ても、若い父親と娘として見えるのだろう。

「パパア。この娘どうしますの？」

「だから、違つて 髪の色も眼の色も全然違つたらう」

「いまだき、父親に似ない娘なんて、山ほどいるさ」

異民族同士姻族関係を結んでも咎められなくなった今の世の中、父親の因子よりも母親の因子が強ければ父と子が全く似ていないケースも珍しくない。

「大体、こんな大きな子供を作ろうと思つたら」

「分かつてるつて、お子様に子供は作れない」

必死で親子でない事を証明しようと論説するローレンの言葉をさえぎるように、ダヴィードが軽く言葉を返すと二人は屋敷への歩みを速めた。

できるだけ人目につかないようにこそそと屋敷の女主人の部屋に向かう。目的は女主人ではなくて、その侍女のヴェーラである。

「ばばあ？」

幼子の発言を確認して、繰り返した彼女の第一声は、予想を裏切らず、想像してた通りの反応に顔をしかめたローレンだったが、説明するのだけは省略しない。

「先ほど庭をダヴィードと散歩していたら、この子が居たんだ。なぜか僕を父親と勘違いしてる」

「はあ」

あきれたようにヴェーラは言葉をもらす。その反応も予測済みだし、いちいち反応するつもりはないので、自分の用件を伝える。

「とりあえず、こんなカツコじゃ可哀そうだから、洋服を用意してもらえないだろうか」

「えっヤダ。この裸じゃない。なんかしたの」

「知らん」

コートを脱がそうとして、手を止めたヴェーラが怒気の籠った声でこちらを見るが、正直な話「何も知らない」のだから正直にそう

答えた。

「ぱぱーあ」

彼女たちが部屋の中に入ってしばらく待つと、洋服を着せられた幼女とヴェーラが出てきた。白を基調とした赤い小花模様のドレスに身を包んだ姿が愛らしい。長い金色の髪が走るたび流れるように揺れてベールの要に広がるのが、よくドレスに合っていた。

髪はほんの少し湿り気を帯びて、頬は少し赤みがさしている事から、湯を使って汚れを落としたのだろうと推測する。顔色が良いのも可愛らしさを際立たせていたに違いない。

「ヴェーラ。君はかなりセンスが良いんだな」

パパと言って抱きしめられている事実よりも、短時間で愛らしいレディに仕上げた感性に、素直に敬服する。

「そんな事よりも『パパ』はどうするつもりなのよ」

「とりあえず、『パパア』ではなんともできないし、ヴィオロン様に報告だな」

ローレンは彼女に抱きしめられていると、なんとも言えない安堵感が体をじわじわと染めていくのを自覚していた。本当に知らない存在に「パパ」と呼ばれている事実や、彼女の所在をどうするかを悩んでいたことよりも、なぜか守らなければいけない想いに駆られている。

そんな『パパ』とは違い、傍で見ている二人はこの幼子の存在をどう扱うかローレンに尋ねるが、不幸な結末にならないように頭を悩ませていた。身元もはっきりしない者をこの屋敷は受け入れるだろうか。答えは恐らく、否であるなど、ダヴィードは直ぐに結論を出したため、直接の上司に判断を仰ごうと思ったのである。

「そうだな」

幼子を抱き抱えたままローレンは立ち上がると、屋敷の執事が休む部屋に向かう。勿論、ヴェーラには軽く礼は済ませた。

「どうなったのか、明日、教えなさいよ」と彼女は扉を閉める前にこっそりと言っていたが、明日のモーニング・ティーの時間に結論

は出るだろうかあやしい時刻である。

隠し子に間違われるのは些か否めないとして、誘拐してきたと勘違いされないように話を進めるのは、どうしたらいいのだろうかと悩みだすと、足が次第に重くなつていくのが不思議だった。

結論は先伸ばしでもかまわないから、相手が眠っていて欲しいと願いながら、部屋の扉をノックした。

彼が彼女と出会い、保護者となる話を続けるためには、まず彼がこの国の第三王子の住む屋敷の執事になった辺りから話をはじめなければならぬ。

その日は比較的でもない普通の日であった。いつもと違うのは、前日より風が強く、作業に手間がかかっていた事だろうか。一日の業務が思った以上に手間取ると、必然的にその後の行程も遅れることとなる。遅い夕餉を取ろうと家のものが食卓を囲む。時間のずれは生じていたが、いつもの行程、食事、就寝を行えば明日またリセツトされ、いつもと同じ時間、同じ作業行程の中、生活業務を行う。小作人の選択肢といえ、畑に出かけるか、羊を山へ連れていくかの違いだけだ。

今日一日が無事に終わったことを神に感謝するため、主人が長い感謝の言葉を語り終えたそのときに、家の扉が強く叩かれた。

居候であっても、衣食住は与えられ家族と同様に食事を許されるが、このような場合対応に出るのは、夫人ではなく一番下の息子でもなく、居候であるローレンだった。

食欲は当然あったが、表情には出さず暗黙のルールとなっている対応作業に向かう。ゆっくり扉を開けるとそこにはこの国の第三王子の姿があった。

目が合った瞬間、扉を力の限り閉ざす。大きな扉の音に、家人が驚いたまなざしをこちらに向けるが、そんな事は気にしていられない。

「御挨拶だな、ローレン。久々に会ったというのに、なんだその態度は！！」

目が合ったと感じたのは、ローレンだけではなく相手もそうだったらしい、視界を閉ざした相手がローレンだと認識して相手は怒鳴る。

「私は貴方様など知りません。どなたかとお間違いでないでしょうか」

絶対家に入れてはいけないと体全体が抵抗していた。

外から聞こえる声は知らない人間に対して発せられるセリフではないことは、誰の目から見ても分かる。加えて入り口をドンドン叩く音に、家人は尋ねずにはいられなかった。

「ローレン。誰なのだ」

「どなたなのか、存じ上げません」

「ローレン！！」

扉を叩く音は、今にも壊しそうな勢いで、相手の声は恥ずかしいぐらいに大きくなっていった。

「お早めにご退去を」

知らない知らないと言いながらも言葉遣いは隠せなくて、おそろく知り合いでローレンが気を使う相手だという事は予測されたが、このまま放置しておくわけにも行かなくて、近所迷惑な客人に家人が声をかける。

「失礼ですが、ローレンは知らないと申しております。どなたかは知りませんが、お帰り願えませんか」

「私を知らないと言い張るのだな、分かった。教えてやろう、私の名は、ソロヴィヨフ・ヴラデーミル・カールルエヴィチ。それでも知らぬと言うのだな」

ヴラデーミルの名乗りに家人が青ざめたのは言うまでもない。

「なぜここに？」

おびえる家人のまなざしを背中に感じローレンは家を出た。

王子の名前など知らなくても生きていける田舎で、王家の鷹の名前まで名乗るのは嫌がらせなのか、その名前の意味を知らない天然なのか、何の問題も意識していない表情で王子はローレンに続く。

この家人たちの場合、ローレンの父セーヴァが軍の兵器開発主任なんぞに抜擢されている時点で、この国のお偉いさんの名前は耳にこびりついていることだろう。

セーヴァが死んだ今となっては、過去の悪夢として。
「いや、私としてはお前が恋しくてな」

どこまで本気なんだろうと、ローレンは顔を歪めた。空腹のせい
か、久しぶりの王子の嫌がらせに体が本気で拒絶しているのか、第
三者の立場から見ても表情は王子に向けられるものではない。

「僕はもうシヤムでも何でもなし」

「だからだよ」

「は？」

「両親もいない、地位も後ろだてもいない　　そんなお前が心配で
な」

ローレンの父は、この国を戦争大国とさせてしまった技術を提供
した科学者である。（正しくは、ローレンの父だけの知識ではな
かったが）

王は褒美としてこの国の貴族より高い身分を科学者に与えた。ア
レキサンドリナという街に大きい屋敷を与え、街から外に出ないよ
うに縛り付けた。一人息子も同時に住居を与えたのは、科学者への
人質。少年から青年になる初期の息子には拒絶できる意志もない。

貴族以上の身分があったのは過去のこと、現在は父が病死し、地
位は返上しているため、ローレンはただの平民へと成り下がってい

る。母方の親戚の山村で居候として日々暮らしていた。

望まぬとも併合された国、巻き込まれた国民、足りなくなった兵力を補充するために連行された農民、自国民であったとしても戦争というモノには憎しみを持つ人間が多い。ローレンがセーヴァの息子というだけで、他者の見る目は『人道に反する罪を犯したもの』として軽蔑していた者が多く、父方の親戚は勿論、過去に住んでいた村の人でさえローレンを拒絶した。彼の素性をよく知らない母方の親戚の親切に身を隠すように入り込んだのも事実である。

「本来の 用件は？」

心配だから、会いに来た そんな人ではないとローレンは知っている。腐つても王子様なのだから、自分でここまで来る必要はないだろう。わざわざ、住居を探し出してまで訪ねてくるのは、他者には言えない何か他の用事があるのだと、感じたのだが。

「とりあえず、私の執事になれ」

「いやです」

内容は大したことがなく、考える間もなく拒絶する。

「なぜ即答なのだ！！」選ぶ権利もないだろうとばかりにグラディ―ミルは詰め寄る。

「別に、殿下に心配してもらわなくても、今の生活には困っていませんが」

嘘だった。

昔から住んでいた村では、父が科学者になって貴族階級に召し上げられたということは、皆が知っている。ポーランの兵器開発にかわっていたというものは、よく知っていることであろう。母方の親戚も父方の親戚も、よく思わない人間が多い。親戚に疎まれながらも、生きていくには独立は不可能であった。

飼っていた羊も鶏も居ない上、住む家も無い、自給自足の方法は分かっていても、明日飢えをしのぐ方法がない。アレキサンドリナから追い出された時に、こうなることは予測できたが、元に戻る選択肢をワザと選んだ。

父が残した財は多少あったが、ローレンはそれをすべて退職金にわりに屋敷の使用人に分け与えた。それは父が残した功績による報酬で生きていくのはローレン自身が反吐のでる行為である拒絶と、今まで世話をしてくれた使用人に対しての礼と是から無職になる謝礼でもあった。

「では、それとも何か、私のことをデーマと呼んでくれるのか？」
デーマと愛称で呼ぶか、執事になるかを天秤にかけさせる。ローレンは立場上、愛称で呼ぶのだけは嫌だったので、たいていの要求には首を縦に振っていた。

それは過去の話である。

「嫌ですよ。デーマ様」

とてもきれいな笑顔で一言。

自分の要求が思ってもみない方向に通ってしまったので、ヴラデイーミルは拍子抜けしてしまう。「なぜそちらを選ぶ」と固まってしまった。嬉しさのあまり顔が赤いのはローレンの気のせいではない。

「満足されましたか、ではお引き取りください」

固まったままの王子に一礼をし、そのまま背を向ける。

静かに家の中へ帰っていく友人にヴラデイーミルは声をかけられず、ただ見ているだけしか出来なかった。

「王子は、何の用だったのだ」

なんでもなかったかのように、ゆっくり帰ってきたローレンを捕まえて、家人がローレンに質問する。その勢いは質問と言うより、尋問に近かった。

青ざめた表情は変わっていない。

「僕を召抱えろと」

「は？」

ローレンの拒絶の態度と、直々に王族がこんな家にやって来た事で、とても悪い結果を想像していた家人は驚きのあまり、声を漏らした。

家人が思考を整理するのを少し待ってからローレンは結論を伝える。

「勿論お断りしておきましたが」

「な、なんだって」

「何か問題でも」

「大有りだろ。今からでも遅くない、お受けして来い」

そして、ローレンは今夜の晩餐にはありつけず、実質、家を追い出されることになった。

当たり前前の反応だな　とは、いまさらながらに思う。

王子の顔が知られていない偏狭の地であったとしても、戦争好きの王の噂は皆知っている。最近でこそ、直接的には戦争を仕掛けることはなくなつたが、いつなるとき気が変わるか分からない。その息子が所望しているものを断つたとならば何をされるか怯えて暮らさねばならない。

実際は、ヴラディーミルは父王とはかなり仲が悪いので、そのような結果にはならないことはローレンは知っているが、王族の内部事情など知らない農民には、王の機嫌を損ねないための当たり前前行動だといえる。しかも、ただの親戚、ただの居候。自分の家族の平和と、厄介ごとの面倒まで見る必要があるのかを天秤にかければ、必然的にローレンを王族に差し出すことになる。

「殿下」

つい先ほど固まつた場所で、同じように固まつたままの王子に声をかける。

王位継承権は三番目とはいえ、この国の王子様である。このような場所で放置されたまま、誰も回収に来ないのは計算外だった。

せめて、ここに居なければ「お帰りになられていました」とでも言えたのだから、ローレンにとって、真に残念な結果である。

「先ほどの話。仕方がありませんので、お受けいたします」

ため息を吐き出して言う言葉に、固まつた王子の時間が動き出した。

「そうか」

満面の笑みで手を握り締め、上下に振り回す。

ローレンは嫌々ながらも、久しぶりの王子の子供のような行動に、変わっていないなと安心感を感じていた。依頼を受け入れた事を、心の底から喜んでいるのが見て取れるからである。

彼が最後にヴラデーミル王子を見たのは、王子とその妃の結婚式のパレードの日で、文字通り見た日である。

いつもどおりゆっくり降る雪の中。いつもと違うのは街中がその珍しい出来ごとで、皆興奮していた。普段静かな街が珍しく沸いていて、多少見物場所は違うものの貴族も商人も関係無しで、街路に並んで華やかな催しを見届けようとしていた。市民達の熱気で驚いていたが、自分もふらふらと街頭に歩みを進めたのは、二人を祝福しようと思っただけではなく、その催しに興味を引かれていたためだ。

王位継承権は勿論ない王子が、他国から妃を迎えるのはそんなに珍しいことではない、ただ王族の結婚お披露目目的パレードを行うのは始めてで、外国がぶれの王子がどこかの国の王族を真似て大々的な結婚式を市民の前で行いたいと望んだのだろう。

王都ではなく、別荘地として作られたアレキサンドリナで行ったのはなぜかという話題が、新聞のしばらくのネタであった。

街道に並ぶたくさんの人たちの中に混じることはせず、一步後ろで時計店の壁に寄りかかっていると、遠くから王子たちが乗っているとされる馬車が近づいてくるのが目に入る。盛装された姿は華やかで、このポーランで現実のものではないような雰囲気を感じた。

冷やかし半分で見に来ていたローレンも、馬車の上で手を振る二人に釘着けにされていた。

ローレンが現実的ではないと感じたのは、王子の隣に座る女性のせいであつたのかもしれない。嫁いできた隣国のコウクナの姫は亡くなった姉姫に瓜二つで、姉妹なのだから当たり前なのだが、まるで彼女が王子の妃になったのかと思う。王子は、亡くなった王女に

恋心を抱っていた。その恋心を知っていたローレンは、亡くなった彼女のかわりに妹を選んだのかと少し疑う。

そんな事をぼんやり考えていると、王子がローレンに気がつき、こちらの方だけを向いて大振りに手を振り始めた。今までの華やかで高貴なイメージが一瞬で台無しである。周りの貴婦人からも小さく笑い声が聞こえる。こんな、子供みたいな人にそんな深い想いがあるはずないと一瞬の思想を振り払った。

王子は通り過ぎても振り返ってこちらに向かって手を振っていた。花びらや、紙ふぶきではなく、いつものように降る雪が、二人を祝福していた。

その日は、ローレンがアレキサンドリナを最後にした日でもある。

ヴラデーミルの屋敷はローレンの集落からさほど離れていない領土内にあった。

まるで、この場所に滞在しているのを確認してから、建物を建てたとは思えないなと　ため息をついた。

切り出した石を積み上げたものから、生えているように突き出た鉄の門を潜り抜け、歩みを進める。この位置からは屋敷自体が見えないため、どれだけ大きな庭なのかと思う。

王族が住む屋敷なのだから、大きいのは当たり前なのかもしれないが、以前ヴラデーミルが与えられていた屋敷は、街の中にあつたためか、そんなに大きいとは思えなかった。

「アレキサンドリナに戻るのかと思っていました」

ここより、もう少し南の都会を思い出して、嫌な顔をする。ヴラデーミルも何か思うところがあつたようで、同じように表情は歪んでいた。

「あの屋敷はな、七番目の弟に取られた。王都は嫌なのだそうだ」
「いつ？」

「私が結婚してすぐ　だったかな。私は妃と共に南部から追い出されたわけだ。コウクナの姫が逃げないようにといいわけのように思えて仕方ない。」

そして北に戻された。しばらくは王都に居たが、もう少し政治的に動きやすい場所をと兄殿下に相談したら　この土地にある廃館を与えてくれた」

「こんなところに、廃館などありましたかね　」

山羊を連れてこの近くまで来たことはあるが、記憶の中に貴族が好むような屋敷は無く、遠く前に建つ建物など記憶の中の映像から、全く思い出さない。

「改修したから、元の形はさっぱり分からんぞ」

そんなローレンの頭を読むように、ヴラディーミルは軽く笑う。

「この土地にはお前が居た。偶然ではなく、兄殿下が更に気を利かせてくれたのだろう。私がお前と仲がいいのは知っていたみたいだしな」

あれは仲がいいと解釈するのだろうか、以前の記憶を思い出す。自分の屋敷で大声を出して自由気ままに入り込み、他者の意見など聞く耳も持たず（王族に意見などほとんど出来なかったが）、何かあったら名前を愛称で呼べと強要する。自分が困る姿を見て喜んでた、俗に言う『嫌がらせ』を受けた映像が頭の中で浮かんで消えていく。

「兄殿下とは」

二人のどちらかだということは分かっていたが、王子が他の兄弟の話をするのははじめてで、どちらの兄を指して居るのか普通に興味があいた。

「一番王座に近い方、ソロヴィヨフ・イジャスラフ・カールルエヴィチ第一王子だ。今は只の軍人だが、将来は良き王になれる方だ。」

第一王子でありながら、あいつに嫌われていたからな。軍人となつた翌日に軍隊の最前線で指揮を取らされておられたから、兵士の苦勞も、相手国の悲劇も目の当たりにされている」

「よく今まで、ご無事で」

「神は、尊い人をお守りくださるのだよ」

「そうですね」

神は誰も見守っていないという言葉を押し殺し、ヴラディーミルに同意した。

ローレンは無神論者ではない、休みの日には教会に行き、食事前には祈りをささげる、困つたときには、あきらめる前に願い事をしてしまう。以前奇妙な出来事に巻き込まれ、神の存在意義を知ってしまったため、心の底で少し反論してしまうのだ。

神様は、見守ってはくださっていないと。

扉の前に王子が立つと入り口の鈴を鳴らす。かなり分厚い扉がゆつくり開かれると玄関ホールが目に入った。

「お帰りなさいませ、坊ちやま」

玄関ホールには、知っている姿が頭を下げ、挨拶をする。

「ヴィオロン」

懐かしい元付き人に嬉しさのあまり、相手の名前を呼んだ。

「お久しぶりです。坊ちやま」

元主人に変わりのない挨拶をする。

ローレンが貴族と同じ身分を過ごしていた頃に屋敷の執事だとはじめから居たのがヴィオロンである。背の高い青年は、ふさわしくない行為を行うと一度は注意をするが主人の意思が変わらない場合は、静かに控え、なんともすごしやすい相手だったと思い出す。

因みに、田舎の山奥から突然身分の高い存在にさせられたローレンに、服の着せ方、選び方、言葉遣いなど貴族社会で生きていくための礼儀作法や知識を教え込んだのもヴィオロンである。

「元氣だったのだな」

変わらないその姿に、自然に笑顔がこぼれるが、気がついた。

「ヴィオロンは何故捕まった」

「いくあてを探していましたら、普通に捕まりました」

「気の毒に」

屋敷の主人の悪口となる悲劇を堂々と語り合う二人に嫌な顔をせずブラディーミルが笑顔で割り込んでくる。

「因みに餌は、お前だローレン」

「ヴィオロン？」

「なんででしょう」

元主人の不快な表情を気にせず、丁寧に戻す。

「なんなのだ、それは」

「言葉どおりですよ。ヴラディーミル様が坊ちやまに会わせてくださると言われ、こんな土地まで連れて来られたのです」

「こんな土地って、アレキサンドリナよりはいい場所だと思うが」

「そうでしたか、大変失礼いたしました」

「ヴィオロンがいれば、私が執事になどならなくても構わないですよ」

執事経験がローレンの屋敷に居た期間は少なくともある男性が屋敷に居る。経験が全くない自分を必要とする意味が分からないとヴラディーミルに質問すると、屋敷の主は気だるそうに答えた。

「そういうわけでもないのだ」

「？」

ローレンは言葉の意味が理解できなくて一瞬不思議そうに眉根を寄せる。

「ローレン様、私は、ヴラディーミル様にお仕える気はありません」

ローレンの疑問を解決する言葉を伝えようと、ヴィオロンは小さく笑う。

「って事を言うのだよ」

その言葉は聞き飽きたと顔に書いてある。あきらめの悪い王子様はヴィオロンを何度も説得し、何度も同じ回答を受けていた。何度も繰り返される勧誘の説得に、嫌な顔ひとつしないで、やんわりと笑顔を絶やさずに答えを伝える。双方とも、普通の人間ならば諦めるか怒るかしている状況を、ただ、変化無しに繰り返し、いまだにあきらめていない。

執事になることも、執事になることも。

「ではなぜここにいる？」

ローレンの疑問はもつともである、仕える気が無いのであれば屋敷にいるのはおかしい。

「ヴィオロンは霧の国からあいつがワザワザ連れて来た、有能な執

事なのだよ。ステュワードとバトラーの両方を難なくこなし、その指示も的確だと言う。フットマンが数名いれば、ヴァレットの仕事も任せられる。さらに家庭教師も併任できる素晴らしい男だ。妻も居ないから住み込みもさせられる」

ローレンは王子の言葉に眉をひそめた。唯一家庭教師という言葉だけが理解できるが、後は何を言っているのか分からない単語がヴラディーミルの口から出てくる。

「そんな、有能な男が昔から私の屋敷で仕えるのは嫌だというのだ」「仕える主人は自分で選べるのが、この使用人職の良いところです」子供のようにほおを膨らませ不満をローレンにぶつけるヴラディーミルとは対照的に、静かな表情でこっそり漏らす言葉にローレンは驚いた。

「そんなおまえが、よく僕の屋敷に居てくれたな」

「私の選んだ主人はローレン坊ちゃまです」

「そう繰り返すのでな、ローレンを我が屋敷に連れてこれば、ヴィオロンが付いてくるだろうと話をすると、かまわんと言ったのだ」

「ヴィオロン。長い間会わないうちに、性格が変わっていないか」

「全くの気のせいです」

屋敷のしかも執事となると、現状の薄汚れた姿で屋敷を歩くのは問題だと、ローレンはヴィオロンに浴室へ連れてこられた。ヴラディーミルも当然のようについてくると言っていたが「客人の行動に付き添うのは無礼ですよ」とヴィオロンに窘められた。

今は、ローレンもヴィオロンも客人扱いなのだと認識をする。ただ、客人が主人を窘めるのが普通なのかは疑問であったが。

「ヴィオロンは、何故、僕の屋敷に居たんだ？ヴラディーミル様が嫌だというのはよく分かるが、他の貴族の屋敷でも欲しがっただろう」

タブを隠すように引いてあるカーテン越しにヴィオロンの存在が

確認できるため聞いてみる。

「当たり前のことですが、この国の方はこの国の礼儀を執事に求める。私は祖国では有能とされていても、こちらの礼儀は全く知らない。相手への敬称の使い方でさえ知らないのです。私達は7名国から連れてこられました。皆、礼儀をわきまえない使用人だとレツテルを貼られてしまいました」

連れて来られたという個所に引っかかりを感じたが、その疑問より相手への敬称への対応に思い当たる過去があるため、そちらを質問する。

「確かに、ヴラディーミル・カールルエヴィチ様と殿下の事を呼ばないな」

ここポーランドでは、親しくないものの名前を呼ぶ時や、敬意を払う際に、対象の初めの名前と父の名前を合わせて言う。父の名は家と立場を表しているため、名前より重要視されていた。貴族でなかったとしても、本人の初めの名前のみで相手を呼ぶことは、無礼な行為に当たる。

「我が国では、自分より上の方をそのように呼ばないのですよ。ロレン様は貴族ではないから、咎められる事もないだろうと 貴方の屋敷に逃げ込んだのです。何も知らない貴方には、実は私の国の礼儀作法はお教えできましたが、こちらでの正しい作法は、勉強しながら実行しておりましたので、とてもバランスの悪いものになっていたかと」

「知らなかったな、そんなそぶりは全く無かったし。何でも出来る完璧な執事だと思っていた」

ヴィオロンと会話を続けながら腕を動かし、湯が体の汚れを洗い落とした事を目視すると、髪に含まれた水分を搾り落とす。カーテンを引くと立っていたヴィオロンが恥ずかしそうに答えるのが目に入った。

「私にもプライドがありますので」

「屋敷にいるときも、そういつてくれればよかったのに。頭の固い

男だとばかり」

どこへ行くにも傍にいて、何かにつけ世話をやいてもらっていたが会話はあまり弾まなかった事を思い出す。メイド達も恐ろしい存在として、一線を引いていた。

「バトラーは自分の感情を表に出してはいけなくなっています。屋敷の主である坊ちやまにこんな話は出来ませんよ。今だからこそのお話です」

汚れを落とした後はクロークに連れて行かれる。

「執事用のクロークがあるのか」

「このお屋敷の規模ですと、上位用人には色んなものが頂けるみたいですよ」

さてさてとヴィオロンがローレンに見繕ったのはフロックコート。ヴィオロンは黒のフロックコート。ローレンは灰色のフロックコート。上着の丈の長いスーツである。

「個人の趣味に文句は言わないが、フロックコートであれば、ドレスグロブは灰色ではないのか」

ヴィオロンの黒の袖口から出ている真っ白の手袋を指さしてローレンは言う。

「執事は基本 私服です。かといってだらしない服装では、問題があると思われませんか」

優しく問いかけるヴィオロンの言葉に素直にうなずくローレン。その態度に満足そうに微笑むとヴィオロンは続ける。

「結果的に正装に近い服装になってしまいます。主人も正装、使用人も正装。知らない方が見ればどちらが主人か迷うでしょう。ですので、執事はワザと『外す』のですよ」

「外す」

「ローレン様は『外す』のはお嫌いでしたし、ワザと『外す』事が出来るように、灰色のフロックコートをお選びしたのですよ。これならば、洋服に合わせなければならぬ灰色のドレスグロブはかえって嫌味ですので、抵抗なく『白』または『黒』が合わせられる

でしょう」

「相手には、タキシードと組み合わせを間違っていると認識されるのだな」

露骨に嫌な顔をして話を聞いている。

「使用人は、仕方のないことなのですよ」

渡された黒の手袋に違和感を感じる、作法が合っていないからではなく、右と左の生地に分厚さが違うように感じられた。指を通すと厚さの違いは気のせいではないことがよく分かった。

ローレンが左手のドレスグローブに指を通した状態で停止しているの気がついて、ヴィオロンは「特注というわけではありませんが、右より左の方が厚くて強い生地になっています。利き腕とは逆の方が酷使しますから、ワザと丈夫に作ってあります」と語った。

どのように酷使するのは想像がつかなかったが、これから覚えていけば良いと説明を求めるのはやめて、五本の指を奥まで押し込み、隙間を埋めた。

「イジャスラーフ様のバトラーは年季の入ったジェントルマンですよ。元々、イジャラスラーフ様は軍服ですから、『外す』必要はないと思うのですが、ワザと古い組み合わせをスマートに着こなされています。年齢も私どもとは違い、大分高齢の方ですから、それも違和感がないのですね」

「古いスタイルも『外し』で問題ないのだな」

ローレンの問いにヴィオロンは「そうですね」と答えた。

「やっと来たか」

汚れた小作人から、ジェントルマンに様相を変えたローレンはヴラディーミルの待つ部屋へと案内された。

部屋にはヴラディーミルが座席に着き、壁際に背の高い顔の整った青年たちが整列している。

ヴィオロンの後ろに並び、屋敷の主の前まで来ると頭を下げる。

「やはりお前には、スーツ姿が似合っているな」

「久しぶりすぎて、窮屈ですね」

『外し』した手袋を隠したくて両手を後ろに回す。そのしぐさに
ヴィオロンは気がつき「すぐになれますよ」と言った。

「今日からお前を私の屋敷の執事へと任えることを許す。私と大切
なものを守ってくれ」

「殿下」

望んで執事となるわけではないのだが、形式的な言葉とそうでな
い後半の言葉に少し胸が熱くなった。この言葉にて、ローレンはこ
の屋敷の執事となった。

ローレンがヴラディーミルの言葉に、胸を熱くしたことを後悔す
るのは、もう少し先の話である。

「でなんで、僕が責任者なのだ」

何の責任者なのかは分からないが、役職『責任者』が不服そうな声を漏らす。

「私はローレン様にお仕えしているという前提でこの屋敷に配置されています。使用人の責任者としてローレン様がお仕事をしているお手伝いをするわけですよ」

なにもおかしくはないでしょうとヴィオロンはローレンに返した。「おかしいだろ、責任者が下の者に教えてもらって業務をこなすなど」

「責任者ですから、基本業務は監視ですよ。実務なんて覚える必要はありません」

「出来ないことを監視・確認なんてできるか」
理論上は仕組みを知っているし、ヴィオロンの言う意味も理解できる。だが、責任者なんて役職で、具体的な業務を知らないし、できないのは問題ではないのか。

「まず、役職をしつかり覚えていただきましょうか。他の者の前で責任者なんて言ったら、笑われてしまいますしね」

「おまえが、教えただろ」

数分前に「貴方は責任者としてお仕事をさせていただきます」と言った者が、その言葉を否定し笑う。当然ローレンは納得がいかなくて、抗議の声を上げた。

「分かりやすく言いました。大変申し訳ありません」

素直に言われた通りの言葉を覚え発言する主に椅子を引くと目の前のテーブルに手帳を差し出した。少し古ぼけた手帳には手書きの組織図が書かれてある。ヴィオロンが書いたのだろうかとローレンは思いながら、引かれた椅子に浅く腰かけると説明が開始される。まずは図の一番上とその次に連なる円（組織図であれば人、または

役職である）を指さしてヴィオロンは言った。下位の位置に幾つもの円があることから、『責任者』という立場を説明するつもりなのだろう。

「ローレン様はステュワードもしくはバトラーと呼ばれる執事職の仕事をしていただきます。ほとんどは私が致しますので、本務は何もしていただく必要はありません」

「そのステュワードとバトラーとはなんだ」

円の内部には、今ヴィオロンが言った『ハウス・ステュワード』と『バトラー』と記載されているが、ローレンの理解できる言語ではなかったため読めず、ヴィオロンが話した言葉を繰り返す。

「ポーランでは皆様『執事』と呼んでおられますし、区別されている屋敷は少ないと思われるので、ローレン様も聞きなれない言葉だと思えます。

ステュワードは主人のかわりに屋敷の財産の管理を行います。フットマンやメイドなど使用人を雇用・解雇も自由です。領土の境界を管理し、土地を貸し与え、賃借料を徴収します。賃借の結果トラブルとなった場合鎮圧させる必要がありますが、グラデーミル様は管理する領地はありませんので、この作業は不要でしょう。財産管理を一任されていますので、資金を何に使うのか、何に使われたのか、どれだけ不足なのかを確認・使用許可を行います。主人が不在の場合次に権限を持つのがステュワードです。グラデーミル様が奥様と共に、屋敷を留守にされた場合は、すべての権限がステュワードに委譲されるわけですね。

バトラーは、主に施設管理を行います。施設とは、屋敷・庭・馬舎・食事・人材を指します。ステュワードが屋敷の外を管理するかわりに、バトラーは内部をすべて管理するわけです。屋敷の維持はフットマンやメイドに任せます、庭は庭師に、馬舎と馬は馬番に、食事はシェフに、人材は、女性の部分をハウスキーパーに任せています。食卓に出る食器の管理と添えるワインだけは、他者に任す事は許されません。ステュワードが居ない屋敷では、バトラーが両方

を兼務します。あとヴァレットの居ない屋敷では、そのかわりもするはずですね」

「フットマンとヴァレットとは」

「フットマンとは、メイドの男性職ですよ。本来はメイドがフットマンの女性職でしたが、最近ではメイドの方が多くなってますしね、ローレン様にはこちらの方が分かりやすいかと。こちらの国ではメイドが表立つのが当たり前となっているようですね。ヴァレットは主人の身の回りのお世話をする人間ですね。洋服を選んだり、マナーを注意したり、飲み物の管理をしたり」

「飲み物とはそんなに重要なものなのか」

「人として生きるのに、一番大切です。人とは、神の血、ワインと共にあるわけですよ。他者は飲み物で主人の知性を疑うのですから、使用人は主人が恥ずかしい思いをしないために飲み物を選ぶわけです。まあ、選ぶワインで同じ料理も味が変わりますから、腕を振るったコックのために最高の組み合わせを差し出す楽しみもあります」

「ホントに文化が違うのだな」

「ええ、ワインや紅茶に大量のジャムを添えて舐めるのが当たり前だと言われた日には、国に帰りたくありませんね」

「ジャムは大事だろ。舐めるのが嫌なら、混ぜて溶かしこめばいい」

「ジャムがおかしいのですよ」

「ハウスキーパーは具体的には何をしています？女性の部分を任せるというだけ、女性なのだろうが」

「家事のすべてを決める権限を持っている女性です。後は、メイド達の責任者。という形ですか、メイド達の教育をお任せしています。相応しくない女性の報告は彼女から頂くので、こちらとは直接関わりが多いかと」

聞きたい事を確認し、分からない言葉が尽きるとローレンは表情を歪めた。

長い説明で理解できなかったわけではなかったが、思っていた以

上に複雑な使用人事情に頭が拒絶反応を起こしたのだ。

「使用人とひとくくりにしてたのだが」

「使用人になって初めて分かる序列です。ヴラディーミル様は私の国の方式がお気に召したようで、他の貴族のお屋敷はここまで明確には分かれていませんよ。それに　ローレン様は何もされなくても、対外的に恥はかせません」

ヴィオロンはこんな熱い男だっただろうかと記憶をたどる。口調そのものは昔と全く変わらないのだが、『大切にされている』という気持ちがじわじわと感じられるのが、ある意味暑苦しい。

質問をすれば返してくるし、聞けば教えてくれる、足りなければ補足し、ローレンの機嫌を損ねそうになったら距離を置く。当時は、業務上必要最小限の会話と、親しくならないように接せられていた、むしろ関わり合いを拒まれていたように思う。ただ、こんなヴィオロンが本当の姿であっても悪くない気はしていた。

「ローレン様、明日からは使用人として生活していただきますので、朝は早いのですが」

「何時ぐらいに起床すれば影響がない？」

「八時にはお支度が済んでいれば問題ないと」

「それで早いのか」

「はい。では、今夜は軽くお召し上がりになって、お休みください」
そう言われて目の前に軽食を差し出されたことで、自分の空腹を思い出す。

「よく知ってたな」

「お顔の色でなんとなく」

王子のせいで夕餉を逃してしまっていたが、食べるものもなく、また、少ししか食べなくても平気という生活に慣れてしまったため、あえて食事の話はしていなかった。何も話していないのに「なんとなく」事情を察してしまうのは付き人として素晴らしいスキルなのだと思う。改めてヴィオロンを評価し、かなり遅い夕餉を胃の中に入れて落とした。

朝の仕事の一番は、主人を起こすこと。ヴィオロンがローレンに依頼したのは主人の支度の手伝いだっただ。

モーニングテイーをいれるため、移動式のワゴンに乗せたサモワールに炭を入れ湯を沸かす準備をし、上のポットに茶葉を入れる、紅茶液の用意をすると、サモワールごと屋敷の主人の部屋まで移動をはじめめる。向かう途中の廊下の窓から見えた庭には、これから起こす予定の屋敷の主人、ヴラディーミルが剣の稽古をしていた。

真剣なまなざしが、いつもの暴君とは違う人物に見えるのが不思議である。

部屋の前までたどり着くと、扉をノックする。先ほど窓の外で剣の稽古をしているのを目撃したため、居ないのは知っていたが、とりあえずの礼儀である。

当然室内からの反応は無い。

炭は直ぐに燃え尽きる心配は無いが、湯気にさらされた茶葉がふやけすぎて入れ時を逃してしまうのが残念で、先に主人の朝の予定を確認しておくべきだったと後悔していた。

「あら、お久しぶりですね。ローレン様」

入り口でうつむきながら悩んでいると、不意に声をかけられた。

声のほうを向くと、隣の扉の前でコウクナの姫が笑顔で立っている。

「フエイカ様」

心の咎の一つとなっている女性の名前をいつつばやく。彼女がもういないと知っているのだが、頭の中は居ないはずの人間を認識してしまう。

目の前に居るのはその妹姫でヴラディーミル王子の妃。

「失礼しました。エリン様」

隣国コウクナの五番目の姫エリンである。

「まだ、姉姫を覚えて居てくださるのね」

五番目のコウクナの姫は笑うが表情が悲しそうに見えたのは、ローレンが後ろめたいせいだけではないと思う。

「デイーマ様は剣の稽古ですのでお部屋にはおられませんわ」

彼女の親切に知っていますとも答えられなくて、困ったようにローレンは笑う。

「デイーマ様が朝ちゃんとききられるなんて思ってもおられなかったのでしょうか。今お呼びしますから」

そう言っただけで部屋の中に入ると扉を閉めた。

取り残された状況下、普通執事が呼びに行くのではないだろうか、頭を抱える。

「まだ続けたいから紅茶でも入れてもらいなさいですって、お待ちの間、かまわないかしら？」

控えめにあげた扉から、少し首を傾けてこちらに質問するしぐさに、ローレンは「喜んで」と返事をした。

開かれた女主人の部屋に入室すると、甘ったるい華やかな色や匂いがほのかに漂う。貴族の女性の部屋に入ったのはこれがはじめてで、慣れない香りにローレンは軽く頭痛を起こしていた。

部屋の中に立つ夫人の姿が二人に見えるのは、頭痛のせいだろうか。

女性独特の香りは、こうまでも自分を惑わすのかと痛む部位を抑えるが、そんな訳はない。よく見ると洋服の色が全く違うため、幻覚でないかと認識した。

「えっと エリン様？ そのお嬢様はどちらさまで」

よく様子の似た相貌、背格好の女性が二人。一人は先ほどヴラデイミルに繋いだ彼の妻。もう一人は誰なのだろうとローレンは尋ねる。

「私の妹ですわ。身の回りをさせようと連れてきましたの」

エリンよりも少し幼い表情が妹だと知る方法である。

本人がいなければ、妹がエリンだと言われても誰も疑うことはないだろう。

似た顔が二人並ぶことでエリンをフェイカと間違える幻影は見えなくなる。

「侍女のヴェーラでございます。ローレン様以後お見知り置きを」
妹姫が侍女と名乗る。行儀見習いを兼ねてか、姉の心の支えとなるべく母国から送り込まれたか、今の発言からは予測もつかないが本人は、女主人の妹ではなく、侍女として仕事をするのだとローレンに伝えていた。

「影武者にもなりますのよ」

「お姉さま エリン様」

言いなおした姉の名前が冷たく響く。恥ずかしいからおやめなさいとばかりの表情でヴェーラは姉を睨んだ。

笑えない冗談ではあったが、夫人が気の毒であったため、口元に手を当てた。口元に手を当てたのは、ひきつった表情を隠すためではなく視線を二人から外すためだ。女性のように添えるようになって、咳込む直前の様な姿勢をとったため、必然的に視線が外れる。当初の目的であった、女主人へのモーニング・ティーを入れる作業に入った。

手元の懐中時計に目をやりながら、ローレンの作業をまるで珍しいものを見るように見つめていた二人を気にすることなく作業を進めると、頭痛の原因で甘い香りをかき消すように、紅茶独特の茶葉の香りが部屋に漂う。

出来上がった紅茶液を二人分カップに注ぎ、下の蛇口からお湯を注いで濃さを整える。

「お待たせいたしました」

二人の前に紅茶の乗ったソーサーと小さなクッキー。黄色のジャムを差し出し軽く会釈した。

「おいしい」

カップに口をつけたヴェーラが感想を漏らす。エリンも同じような感想を持ったようで微笑んで頷いた。

エリンはそのまま、紅茶をうまいとほめられた事を満足そうに微

笑むローレンのほうへ視線を動かすと「そんなお顔もされるのですね」と驚いた表情で言葉を漏らす。

「いつもと変わりませんが、何か変でしたか？」

「以前　コウクナに來られた時も、このお屋敷で先ほどお見かけした時も眉間に皺を寄せておられて、笑われる姿ははじめて見ましたわ」

そんなつもりはなかったと、表情を引きしめると、自然に無表情に戻る。

「」

女主人と侍女の瞳でガラスに映った自分の表情に気がつくとなるほどと納得した。せめて女主人の前だけでも気をつけようと思っ

た。「変わった紅茶の淹れ方をされるから、どんな味かと思ってしまいましたか」

「サモワールはご存知ないのですか」
初めて見たと返事する代わりに二人は大きく頷いた。

「ポーランの貴族で使用している紅茶専用の器具ですよ」

ローレンはサモワールで淹れる紅茶が好きだった。金属製の大きなそれは、装飾だけは細かくあでやかだが、傍でよく見なければ只の金属の壺にしか見えず、壺であれば陶器のそれに負けてしまう。

紅茶以外に使用方法はなく、他に代用するすべもない。最近ではティーポットに茶葉を入れて直接抽出する方法が早くて楽なため、サモワール自体の使用方も知らない貴族も増えている。分解して、組み立てる工程で、炭を入れ、茶葉を立て、時間をかけて湯を沸かし、湯気で茶葉の香りを楽しむ。少し手間をかける事が、楽しくて仕方ない。楽しんで入れたものの所為かサモワールを鼻屑目に見ているためか、ティーポットのみで入れた紅茶より湯の味がマイルドになっている気がして、昔から好んでサモワールを使用していた。

他国から來た姫君は、ティーポットからの紅茶しか飲んだ事がないのだから。隣国から嫁いできて、今日の今まで、誰も彼女たちに

サモワールを使った紅茶を淹れた事がないのだと理解する。

「もしかして　デーマ様は、紅茶はこれで？」

気がついたようにエリンが質問をする。

「殿下でしたらたぶんご存じかと」

質問の意図がよく分からなくて、『サモワールを知っているのか』と勝手な解釈をし、返事をする。「そうですね」と消えそうな声でうつむいてしまう。

その様子に、何か気に障ったのか確認しようと思ったと同時に、寝室から続く扉がノックされヴラディーミルが現われた。

エリンとヴェーラは立ち上がり主人に頭を下げる。

「待たせたなローレン。戻ったぞ」

目的の人物が現れたので、夫人たちに礼をして部屋を出る。主人と夫人の二つの部屋をつなぐ寝室に入る気は全くなかったため、一度廊下へで、主人の部屋へと向かうためだ。

「寝室を通れば早いのに、お前は昔から気を遣いすぎだ」

「エリン様も嫌がるでしょう」

入り口で仁王立ちするヴラディーミルをどかして、応接セットの前までたどり着くと、先ほどと同じく紅茶液に湯を足す。先ほどより、紅茶液の濃度が濃くなっているため、湯の分量は多少多めに入れ、砂糖とミルクを置いた。

「よく覚えているな　私がミルクだと」

「ラリサが、殿下はミルクだから珍しいと言っていましたから」

ラリサとは、ヴィオロンと同じくローレンの屋敷で働いていたメイドである。

好みの分量の砂糖とミルクをカップに入れ、ティ・スプーンをひと回し。ミルク独特の甘い香りが漂う中ヴラディーミルが満足げにカップに口をつける。

「サモワールは香りが良いのだが、優雅さに欠ける　」

よい香りは時間と共に消えていく。匂いが拡散されるとカップの茶が飲むことで無くなっていくからだ。サモワールを使用すると、

カップから紅茶が無くなっても香りは残る。漂う匂いの元は濃い紅茶液を頭に乗せたサモワールから漂わせているからだ。

「それは殿下の偏見です。サモワールほど有意義な器具はないですよ」

ローレンは得意げに笑うとサモワールの蛇口から湯を小さなタブに注ぐ。ドレスグロブを外すと、乾いたタオルを浸して強く絞って簡単な蒸しタオルをつくり主人に渡した。

「こういう使い方も可能なわけですよ」

「便利アイテムとしても有意義なのは認めよう。だが、足して飲むというのが、潔くない」

ティーポットであれば、茶葉の多さと蒸す時間を計算し、自分にあつた飲みやすい茶を入れることが出来る。対して、サモワールは濃い紅茶液に湯を足して自分の飲みやすい濃さを調節する、その便利な方法がヴラディーミルが好きではないのだった。

「そうでしたか」

好みは人それぞれ、ローレンが好きなのを主人が好むとは限らない。主人の好みに合わせるのが使用人というものだろう。

本来ならば。

「では、明日からもサモワールで」

「何故そうなる」

「ポーラン人でサモワールを使用されないのはどうかと思うのですよ」

本当は主人の苦手な事をささやかに行いたいのだが、直接そんな言葉を言えるはずもない。目の前の相手に子供だと馬鹿にされるのは自分のプライドが傷ついてしまう。だから、至極もつともだもが思う個人的な意見を理由にした。

「まあ、サモワールは香りが良いからな。衣服からほんのり漂う辺りは優雅かもしれん」

小さなローレンの悪意も気にすることはなく、主は残りの紅茶を飲み干した。

体と心の力を奪っていく業務が一つ終わり、主人から解放されたローレンは執事室へ戻る。あれから服を着せて、部屋から出るという作業が主人の長話のせいで思うように進まない。

ただ、主人を起こし、紅茶を入れ、洋服を着せかえる作業に何故こんなに時間がかかるのだろうとため息を吐いた。

「思ったより、お早めに終わられましたね」

懐中時計を確認してヴィオロンが言うと、疲れ果てた表情でローレンは「小ぶりの炭が完全に灰になる時間が、『早め』なのか」と返した。

「昼過ぎまでブラディーミル様のご予定はありませんから、ローレン様を解放されないかと思っていたのでですよ」

ヴィオロンはローレンからワゴンを回収すると、応接セットに座らせる。

目の前に紅茶を出すと、回収したワゴンを押して部屋から出て行った。

一人になったローレンは、紅茶の横に当然のように置かれた黒色のジャムを口に入れると手を止める。

「なんてジャムなんだ」

黒に近い赤、赤ワインの原料になる葡萄に似た色だが、葡萄とは違う。果肉がないために何で作られているのかローレンは分からず、ただその甘い味に幸せを感じていた。

しばし休息を取った後にローレンはヴィオロンに玄関ホールに連れて来られる。そこには二人の少年が居た。フロックコートにケインを持つている姿が使用人だという風には見えなかったが、壁に近い位置で並んで立ち、こちらに気がつくと緊張した面持ちで頭を下げる態度から、この屋敷の使用人であると気がついた。よく見れば

『外し』た姿である。

同じ背格好で面影が似た雰囲気の二人は兄弟なのだろうかと見たものを思わせる。主に違うものは髪色。

「これらが私の仕事を補助する。アンダー・バトラーです」

ヴィオロンはそう言って二人の少年を紹介した。

アンダー・バトラーってなんだ！という表情でローレンはヴィオロン達を見てしまうが、口には出さない。今までの傾向から、この後詳しい説明が続くのは分かっていたからだ。

「応接室がメインの東館。客室がメインの西館。双方でフットマンの管理を任せています。さすがにこの屋敷すべてのフットマンの管理は一人ではできませんので」

「東館のアンダー・バトラーはダヴィード」

「よお、おぼっちゃま」

ローレンから見て左側に立っていた少年はダヴィード。赤に近い猫っ毛の髪でジェントルマンスタイルを着崩して着用している。彼の『外し』なのだろう。着崩したシャツはだらし無いと評価する以前に、彼によく似合っていた。だらけた服装に合わせているのか、挨拶に礼儀は感じられない。

「西館のアンダー・バトラーはミハイール」

「はじめましてローレン様」

対象にすべてをきちんと（普通に）整えられている反対側の少年はミハイール。白に近い金色の髪が美しい。にっこりほほ笑む姿は、女性ならば数秒で舞い上がらせる事ができそうだなとローレンは心の隅でその光景を想像した。

「管理というとバトラーの補佐か何か　だから、アンダー・バトラーなのか」

質問をしようとして自己解決してしまうと、そのしぐさを見てダヴィードが馬鹿にしたように笑った。

「ダヴィード、ローレン様になにか」

ヴィオロンの冷たい声に彼の笑顔が凍りつく。誰もがわかる硬直

したしぐさが、恐怖を感じていることが分かった。

「問題ないのでしたら、屋敷の案内をお願いしましょうか」

ヴィオロンの視線から開放されたことで、ダヴィードは安堵し、失敗したとばかりに舌を出した。

「ダヴィード」

ダヴィードが出している舌を見てローレンは言葉を漏らす。

「君はベリラント人なのか」

「はい。彼らは、ベリラントの血族です」

ヴィオロンがそういうと、ミハイールも舌を出す。少年は二人とも舌に刻印を持っていた。

今はポーランの領土となっている旧ベリラント国。戦争に負け、併合された小国だ。男子は純血を守り続け、他民族との子供をもうけることはしない。いつまでもベリラントの誇りを守ることで、精神的には併合をうけつけないと思っつけているのか。彼らは純血の証に、生まれた赤子の舌に焼印をつけていた。

見た目も整った顔立ちが多く、貴族たちの間で噂になっていたことから、ローレンはベリラント人の風習を知っていたため彼らの舌の刻印が痛々しく見えた。

「ベリラントの純血は貴族出身ばかりだと思っていたが」

「王族の屋敷ですから、下級貴族でも使用人として働いてもおかしくないですよ」

ローレンの言葉に、ミハイールが笑顔で答える。

「この屋敷では、使用人の身分は役職で決まります。彼らは貴族階級ですが、この屋敷では、私の下 貴方の下の階級となります」

「だから、先ほどのような行為は大変失礼なのですよ」

ダヴィードを一瞥し、ローレンに向き直ると笑顔を整えてミハイールは言った。

「いや、別に気にする事じゃないだろう。ただ、僕も人のことは言えないが、執事にするにはかなり若くないか二人とも」

「確かに、ローレン様がお見かけになつた執事達は質の良い使用人

でしたね。スキルが高いということはそれだけ長くお屋敷に務めているということですよ」

由緒正しきお家柄であればあるほど、良い使用人を長く屋敷に置いてあるのだろう。不都合がなければずっと同じものが勤め、彼らが失脚すると次に長く勤めていた使用人が上へ上がるというシステムが多い。ローレンは貴族と仲良くしていたわけではないため知っている執事の数は少ない。王に呼ばれるなどしてどうしても出会わなければならぬ時に、ほんの数分顔を合わせていただけ。

「とすると殿下が変なのか」

「それは否定しませんが、若いということとは、それだけ可能性が高いということです。さて、ミハイールお願いしますね」

ヴィオロンに言われてミハイールは頭を下げた。

一階に食堂を、二階に客室を並べていることから、西館は客室がメインとなる。廊下の装飾は落ち着いた感じで、所々花や景色の描かれた風景画が飾られており、絵が劣化しないように日差しをさえるレースもよく見ればシンプルなものが出ていた。

「普段は二階でお客様のお相手をしていますから、どうしても自分の趣味に片寄るんですよ」

そういいながら、ミハイールは前を歩く。

「フットマンにすべてを委ねてる訳じゃないんだな」

「普通ご対応は上位使用人がします。ローレン様のお屋敷もヴィオロン様がされてませんか？」

疑問を唱えたローレンはそういわれて納得した。確かにどの屋敷でも大体執事が対応していた記憶があったからだ。

「主人の代わりですからね。細かい事はフットマンに任せますが、同じ模様の扉を何枚か目にしたところでミハイールが足を止めた。」「お前たち、何をしているのですか」廊下の一番奥の扉の前で数名が扉を囲むように立っている。全員が制服を着ていることから使用人だということは想像はつくが固まって何をしているかまでは想像がつかない。

「ミハイール様」

慌てた様子で一人の青年が声を発すると、集まっていたものが散る様に道を開く。

扉の前で使用人が片手を庇うようにうずくまっていた。

「彼がどうか？」

姿が見えたからと言って何が起こっているのか想像する時間が無駄だとミハイールは報告を求めた。

「ランプを引っかけてしまい」

言われれば、辺りから油の匂いが微かにし、床もよく見れば彼を中心に濡れていた。袖が焦げているのを発見したローレンは座り込んだ使用人と同じ目線まで膝を落とすと「火傷は？」と声をかけた。

「へ、ああ。大丈夫です」

ミハイールではなく突然知らない紳士に声をかけられ驚いた使用人は、焦げた袖を隠して、視線を反らした。

ローレンは彼が隠している手を無造作に取ると濡れた手袋を引き抜いた。言葉通り、手は赤くなっているもの大事ではない。

問題があるとすれば、濡れた手袋が簡単に引き抜けた事だろうか。「これだけ小さい手だ。男性モノでは緩くて簡単に脱げてしまう。」

女性用のドレスグローブは用意できないか」

軽い火傷をおった彼の背格好は回りの使用人達に比べ小さい。手袋も上着も体には合っていないのだろう。

「彼に女性用を着させると？」

使用人の一人が、不満そうな声を上げた。

「作業は安全にこなしてこそだ。女性用と言っても、サイズが一回り小さいだけ、言わなければ女性用だって誰も気づかない。多少薄い分 違和感はあるだろうが直ぐになれる。サイズが合っていないものを着用しているほうが見た目が悪い。上着や手袋、靴などは補正が効かないからな」

「確かにそれは一理ありますね。ジルに頼んで手袋を至急持つてき

てください」

ローレンの話聞いていたミハイールは、近くの使用人に指示をする。不満そうな表情だった男は、一礼をし、走るようにその場を去った。

「彼には火傷の処置と、残りの物は現状復旧をお願いします」

指示がされると、使用人達は壁や床にかかった油を拭き取る作業をはじめ。濡れてしまった絨毯は、その部分を囲み四角に切り取られると、同じような大きさの絨毯が持つてこられ空いたスペースにはめ込まれる。何事もなかったように場所は修復された。

「絨毯はすべてを交換にはならないんだな。なるほど」

長い廊下に一連で敷かれている絨毯を丸々交換すると考えていたローレンは、経済的に安価で、時間もあまりかからない作業に感心していた。

「ポーターだから出来る手法ですよ。毛の短い絨毯なら、つぎはぎがみつともないですから」

注意してみれば、毛色が違う場所が数箇所確認できる。同じ色の絨毯だからといってこの様に部分を切り取り差し替えていけば、外気にさらされている時間が違う為元々あった部分より差し替えた部分が鮮やかになるのは仕方ない。ただ、緩い日差しの中で目を凝らさなければ気が付かない程度、大勢に影響はないと感じられた。

「こんな作業は滅多に行いません。事故を発生させた彼は、使用人としてかなり問題な失敗をしています。解雇しないのですか？」

管理者として質問されたローレンは表情も変えず、答える。

「今回は彼だけのせいじゃない。支給された制服がリスクの原因だろ」

その答えにミハイールは微笑み「失礼ですが、面倒な考え方をされるんですね」と言った。

簡単に西館の説明を受け、元の玄関ホールにたどり着くとダヴィードが待っていた。

「西館で何にもなかっただろ」

自分のほうに歩いてくる二人を見つけにっこり笑うと嫌味を言う。

「東館のように汚れてはいませんか」

笑顔を貼り付けたままのミハイールも軽く返した。

「な、ん、だ、と」

返された言葉が感に触ったのか、ダヴィードがケインでミハイールに殴りかかる。ミハイールは自分のケインでそれを牽制した。

木と木がぶつかり合う音が玄関ホールに鈍く響く。

二人は似つかわしくないケインを持っていた。目の前の小競り合いでそのことに今はじめてローレンは気づく。

「なぜ杖が必要なのだ」

足が悪いようには見えないし、歩行用とすると長さもそんなに長くない。

「紳士の嗜みだぜ。ぼっちゃん」

「ヴィオロン様も本来は持っていたいのだろうけど、執事が持っているのっておかしいですし」

向かい合いケインを打ち合わせたまま二人は疑問に答える。

「じゃあ何故、持っている？お前たちも執事といえは執事だろう」

アンダー・バトラーはバトラーの補佐だとヴィオロンは言った。

執事が持っているのがおかしいというのなら、この二人も持っているのはおかしいだろうとローレンは返す。

「僕らが持たされているのは、護身用ですよ」

「そうそう、ミハイールに寝首かかれないうちに」

「その言葉そのままお返ししますよ」

アンダー・バトラーの二人は仲が良くないようである、逆に仲が

良すぎてこのようにじやれているのか、ローレンには判断ができなかった。自分の疑問に対しては二人とも回答したため、とりあえず次の行動を待つことにする。

「そうか」

にらみ合ったままの二人と、黙ってそれを見ているローレン。三人は時間が止まったかのように何も言わないし動かなかった。

「いや普通止めるだろう」

その時間を動かしたのはダヴィード。黙ったまま見ているローレンにケインを向ける。

「そうなのか、貴族どおしが暴れている現場に遭遇したことが無くて。大人しく見ているのが礼儀かと」

「あば いや、貴族とか関係なくて まあいいか、面倒だ。行くか」

無表情に黙ったままのローレンに自分の想いを説明しても無駄だと早急に決め付けたダヴィードはローレンの手を引き自分のテリトリーへと歩み始める。

ダヴィードが案内する東館では、接客は一人の女性が行っていた。西館のように歩いて案内されるのかと思えば、応接室に通され椅子に座らされてダヴィードと対話する形で業務内容を教えられる。

その間、紅茶などはその女性が用意する。他の使用人の姿はない。

「普通お前が対応するんだろう」

ローレンはダヴィードに耳打ちする。

「まじでか、何も知らないと馬鹿にしてたら、ヴィオロン様みたいな事言うんだな」

もともと知っていた知識ではなく、先ほど西館でもう一人のアンダー・バトラーに教わったばかりの知識だ。

気まずそうに持っていた杖で頭をかくと、上目づかいで小さくつぶやいた。

「本来はそつだ。ただ、俺も含めこちら側のフットマンはあまり人

前に出したくないんだよなあ」

自分を含めと言ったその理由はなんとなくわかる。

ダヴィードは顔だけ見れば整ったどこに連れ歩いてても問題ない召使である。大きな問題はその着崩した服装と言葉使いだ。他者に指導する立場の者がそれならば、フットマン達はもつとひどいに違いない。(これはローレンの勝手な推測でしかないが)

「それに、お客様も綺麗なお嬢様がお相手なら文句も無いだろ」

「はあ」

まあ、昔ローレンの屋敷でも、ヴィオロンがいなければメイドのラリサが客間・応対をしていたのだから、間違った方法ではないのだろうと思う。

「人前に出して恥ずかしくないようにするんだったら」

ローレンが指さしたのは彼女の手。

「頑張っているのは分かるが、可哀そうだろう。ドレスグローブは支給しないのか？」

彼女の手は作業のせいかわれ、所々裂傷が目立つ。ここでも女物の手袋が必要になるとは、とローレンは内心する。

「うわ フェミニスト」

ダヴィードは刻印が見えるように舌を出して嫌そうな顔をする。

「お前 人前でそんな顔するなよ」

「ぼっちゃんの前だけだせ」

同じように刻印が見えるように舌を出して悪戯っぽく笑った。

嫌な顔も、笑顔も舌が出るのか、とローレンは表情を歪める。

「ただなあ、こいつは女物の手袋は小さいんだよな」

周りにメイドがいなくて比較はしていないが、彼女は女性にしては背が高いように思われた。

「なら、男性用で良いだろう」

そう言いながら自分の手袋を外し渡す。

「ぼっちゃんが言うんだから構わないぜ」とダヴィードが言うと彼女は戸惑いながら、渡された手袋を片方はめた。

「僕のではサイズが合わないか、一回り小さいのを用意してやれ」
「はいはい」

ダヴィードは彼女から手袋を受け取るとローレンに返し、そのまま彼女に指示を出した。

メイドは頭をさげて奥の部屋へ下がり、変わりに制服を着た使用人が現れる。

東館のフットマンである。彼はローレンが考えていた様子と違い、きちんとした服装をしていた。礼をする仕草も扉を開けるタイミングも問題はないように見える。

「フットマンは人前に出たくないって言ってたが、何も問題ないように見えるが」

「作法は問題ないさ。言葉遣いも完璧だぜ」

得意げにダヴィードは言う。ならば何が人前に出たくない理由なのだろうと疑問に思った。

ガシャーンと陶器類の割れる音がし、男性の低い悲鳴が聞こえる。聞こえたのは奥の部屋からだった。ダヴィードが顔を引きつらせて笑う。

「ちよつと待っていてくれ、ぼっちゃん」

そして、ローレンに待つように依頼すると音のする部屋に走って行った。待てと言われて大人しく待っているローレンではない、そのまま彼に続こうとするとフットマンに止められた。

「なぜ通してもらえない？」

ローレンの言葉に彼は泣きそうな表情で「ここでお待ちください」と言うだけ。その表情にローレンは大人しく従う事にした。

西館のフットマンは初めて見るローレンに、高圧的な敵意が感じられた。知らない人間が偉そうに指示しているのは、今まで綺麗に守ってきたテリトリーに土足で入り込む様なもので、彼らにしたら何者だと警戒して当たり前なのだろう。だが、こちらはその様な意志は感じられず、逆になぜだか気の毒に感じられる態度をとられた

ため、ローレンは大人しくダヴィードを待つことにした。

「ありがとうございます」

元居た椅子に座ると、彼はお礼を言う。大人しく従ったことに対して礼を言われるのは何かおかしい。

「お前ら、何でもつと慎重に物を扱わないんだ」

「気をつけているのですが。なぜだか」

「なぜだかじゃないだろう。何で真つ先に謝罪がないんだ。結果が証拠だろ」

遠くでダヴィードが誰かを怒鳴りつけているのが聞こえる。聞き耳を立てているわけではないが、向こうの様子が想像できるぐらい良く声と音が聞こえるのは、フットマンが扉を閉め忘れたためだろう。

いや、わざと開けっ放しにしてローレンに状況を分かる様にしていたのかもしれない。

そのまま聞いていると、ガシャンとまた別の音がして「ほらダヴィード様だって人の言えないじゃないですか」と笑う声がある。

「暴力ばかり振るうからバチが当たったんですよ」

「うるさい」

柔らかいものを鈍器で殴る音がし、低い男性の悲鳴が一瞬遅れて聞こえてきた。

「あちらに行かなくても、何となく解るが あれはいつもの話なのか」

ローレンと同室で待たされている使用人が首を振る。顔が青ざめている事から態度で否定していても、肯定ととらざるをえない。

まず、フットマンが何か屋敷の物を壊し、説教していたダヴィードが怒りに任せ体罰を行おうとしたら、自分が別の物を破損してフットマン達に笑われている。という様子が、先ほどのやり取りから想像される。おそらく、最後の鈍い音は誰かを殴り付けたのだろう。「確かに、人前には出せないか」

そう言うと、青ざめたフットマンが入れた紅茶を飲んで、この状

況が収まるのを待つことにした。

遠くでは、ダヴィードの声は勿論、他の男性の声も複数聞こえており、その会話内容から直ぐに終わりそうにない。

屋敷のものをアンダー・バトラー自体が壊したとなると責任は誰のものになるのだろうかと考え、行き着く先は自分だため息をついた。

昨日、ダヴィード達が破損したものは何かと思ひ台帳を提示するようローレンは依頼した。ローレンの屋敷にはヴィオロンの付けた調度品台帳があつて、最終的に財産を処分する時に大変重要な物だったのを覚えていた。おそらくこの屋敷にも似た様な物が存在するはずで、無ければヴィオロンならば作成しているだろうとローレンは予測しており台帳が無い想定はしていない。

「まだしっかりと整理ができていないので、あまりお見せしたくないのですが」

ヴィオロンは素晴らしいながら、百科事典ほどの分厚いファイルを数冊、棚から取り出し、積み上げる。

「破損報告書と新規購入報告書はこちらです」

カゴの中に無造作に積み上げられた書類の山が、目を通してないことを表していた。整理ができている云々よりも、元々ローレンの目的は破損物を探そうと思つていたためカゴの中を探せば目的物は早く見つかりそうである。

「どうせなら、この書類も処理してしまうぞ」

台帳に目を通すついでに消し込みをしまえば時間が短縮されると提案する。

「よろしければ」

素晴らしい残してヴィオロンは下がると、残ったローレンは報告書と台帳を照らし合わせるためカゴの中から書類を出す。先ほどのヴィオロンのあの様子なら台帳の正確さも怪しい。書類の整理が終わったら屋敷内を確認する必要があるとローレンは次の作業を決めて、仕事を始めた。

台帳整理は時間のかかる作業だが特に難しいというわけではない。単純な作業だが成果が目に見えて確認できるため仕事をした証拠ができる。物が残る故により正しいものを作成すべきだとローレンは

意気込むのだった。

書類の一番上は破損した陶器の皿で場所は厨房。東館の物ではない。

報告者は『ジル』と署名がしてあった。

昨日、西館で聞いた名前だと手を止めるが、今必要な事柄ではない。調度品名を台帳上に確認すると赤いインクで『破損』と書き記す。

そんな作業が二、三時間余り、探しているダヴィードや東館の名称は一向に確認出来ず、彼の仕事ぶりが少し伺えた。確かにバカ正直に報告すれば、咎められるだろう。

調度品台帳の東館部分を握りしめ、東館にローレンは向かうのだった。

窓はあるものの位置取りが悪いのか日射しは入らない北側の廊下は日中は誰もいない事が多い。

会ったからといって何かあるわけではないが、人に会いたくないローレンは自然とこの様な場所を選択して歩いている。この屋敷内でなくても同じような道の選択をするのは、もしかしたら人気の無い場所や薄暗いのが好きなのかもしれぬ。

残念な事に、誰も居ないと想定していた廊下の先に女性が立っていることを発見した。制服でないことから、女主人のエリンかその侍女のヴェーラか、それともローレンの知らないお客様か、どちらにせよ気がつかれては面倒だと歩く速度を落とす。急いでいた訳ではないので、女性の歩くスピードに自分が追い付かないように調節したのである。

向こうに見える相手に近づかないように後ろを歩くのは、付け回しているみたいに見えるだろうなあと窓の外を見る。運がよかったのか、当たり前なのか日の当たらない北側の庭には誰も居なかった。「いやあっ」

突然、廊下に響き渡る女性の拒絶の声。窓の外から視線を戻すと、

目の前の女性が男に押し倒されていた。後ろから視角になる位置で隠れていたのだろうか、庭に目線を落とすまで、自分と彼女しか居なかったように思う。

とりあえず救出しなければと走るが、現場までが遠い。

数分前の自分の態度を後悔した。

「なんだ、この服どうなってるんだ？」

焦る男の声がある。躊躇する言葉と同じく、馬乗りになった男は動きを止めていた。女はなぜだか抵抗していない。

もしかして 強姦に襲われているという考えは勘違いなのだろうかと走る足を止めた。

野外ならば可能性は多少あるが、屋敷の中で婦女子に手を出す人間がいるだろうか？

もし強姦ではなくて、只の恋人同士の戯れた遊びなら、自分ほんな出歯亀だと後で散々後悔することになるだろう。

人に出会うというリスクはこのようにしてローレンを苦しめる。

ローレンの苦悩とは的外れで、彼女と男は恋人同士ではなかった。ましてや、知り合いでもない。

彼女は、抵抗すると押さえ込まれる体力が勿体ないとあきらめた様に静かにしていただけだ。相手の抵抗がなくなると、男は事を始めようとするが服の脱がしかたが解らず戸惑ったまま、のしかかっている。

「ホント、犯るんだったら服の脱がし方ぐらい覚えとけよ」

低い声が響くと男は驚き、更に動かなくなる。そんな隙だらけの腹部に彼女は曲げたひざを差し込む、上に馬乗りになっているため男の腹部と言うよりも脇腹に近い。そのままに突き上げた蹴りが腹部に突き刺さるように入ると、その衝撃で男は中に浮き、彼女は自由になった。

その行動わずか数秒。

鮮やかである。

彼女は両肢を上から下へ振り下ろす反動を使い、上半身を起こす

とローレンと目が合った。

女性は侍女のヴェーラだったがローレンには女主人と区別がつかない。

「あ、あらローレン様 見ていらしたの？」

どこから、とは聞かれなかったが彼女の指している内容はなんとなく想像がついたのでうなづいた。

「ちっ だったら助けるよ」と小さくつぶやくと立ち上がる。その冷たい声に耳がおかしくなったのかと疑った。

いや、案外女性などは本性はこんなものかもしれない。

「今のここでの事。姉様にバラしたら、殺しますわよ」

蹴り上げた男が這いながらも逃げ出そうとしている姿を見て、男の襟元をつかみ床に叩きつける。鈍い音と男のうめき声が少し姉様という表現でどちらであるかの判断がやっとなつた。

「こんな大人しい女の子を狙うなんて、ろくでもない使用人です。顔はよくても性格はおかしいんじゃないのかしら」

『その言葉そっくりそのままお前だよ』と思ったが黙っておこうと思う。それより、叩きつけられた男は動かない。

「死ん」

「こんなくらいでありえない」

そう言ってもう一度襟元を掴んでローレンに顔が見えるように起き上がらせる。下半身は床にうつ伏せに寝ている状態のまま上半身のみを持ち上げられているので、無理やりな海老反り体制である。そんな姿が苦しいのか、それとも後ろ襟を掴まれ首が絞まって苦しいのか男は苦痛の表情で何か言葉を吐き出そうとするが声にならない。『ぐ』とか『あ』などの単語が空気と一緒に鼻から漏れる。

「ほら、息してる」

彼女にすれば、何を言おうとしているかは重要ではない、呼吸をしているから声が出るのだとローレンに知らしめたら問題ないのだ。地面に叩きつけられた顔は、元の形の判断がつかなくなっていて、この男が誰なのか分からない。

制服はフットマン達が着ているものに似ているが、それだって所属の手がかりになるものでもない。

「こいつみたいなのが他にいたら問題じゃない。調べてよ」

怒りの表情で使用人をつまみ上げるヴェーラにローレンは先程悩んだ内容を確認しておきたくて、無礼を承知で訊ねてみた。

「あなたが誘われたので」

言葉を言い終わらない内に石の壁にヴェーラの拳がめり込んだ、ローレンの髪が少し切れ目の前を散る。

彼女の暴力的な行動に驚き恐れるよりも先ほどの状況を読み誤っていた事が残念だった、躊躇せず助ければよかったのだ。

「ああああ。ヴェーラ!!」

悲鳴に近い絶叫が廊下に響く。声の主は彼女の姉で主人のエリンである。

「暴力は振るわないって約束しましたからこちらに連れて来ましたのに、何をしているのです。ローレン様お怪我はありませんでしたか」

なんだ 暴力なのは知っているのか、と先程口止めされた事を思い出す。これでは何を口止めされたかが分からずどこまでを話してよいのやらと一瞬悩む。

「私は何も。ヴェーラ様が、このフットマンに襲われたのを撃退されただけですよ。ご自身の身を守るためです、お約束を破られたのは仕方なかったのかと」

変に隠すよりもと理解した現状を正直にはなすとエリンは表情を歪めた。屋敷内で婦女暴行未遂があれば、女性なら怖がることだろう。

「屋敷内でこんなことが起こったのは残念ですが、しばらくはお一人でこの廊下を通るのは止めたほうが良いかと」

「遠回りになりますますが危ないですからね。姉様」

ヴェーラはエリンの両肩に手を添えて歩きます。

離れていく道中でたまに頷いているが何を話しているのかまでは、

残されたローレンには分からなかった。

彼の新しい仕事は、目の前に転がっている。暴れられても困るの
で、気を失っている男の上着を脱がすと、後ろ手と絡め、軽く拘束
した。

「問題はどうかやって運ぶか」

人間一人を人間一人が移動させるのは簡単なことではない。自分
は世間一般的な男子より力はない事は自覚している。自走させるの
が一番楽な方法なのだが気が付く様子はない。侍女は軽く危害を加
えていたが、衝撃は全く軽くないようだ。

起こしている脳震盪で記憶が曖昧になっていないことを祈りつつ、
男の腹に台帳を置き両足を持って引きずっていった。

「ローレン様どうなさいましたか」

上手い具合にヴィオロンに出くわすと、先程あった内容を簡単に
説明する。説明内容は、ヴェーラの暴力は省略したが壁の破損も含
まれている。

ヴィオロンが数名のフットマンを呼びつけると、男はしっかりと
拘束された。食い込んだ縄が、見えていて痛いぐらい強く縛ってある。

「見たこと無い制服ですね、屋敷の物では無いのかもしれませんが」

「そうなのか　　てつきりその制服は屋敷のフットマンかと思った
のだが」

簡易に拘束していた上着を調べていたヴィオロンがそう言うとき
ローレンは自分の意見を述べた。

「背は高いし、体格もしっかりしてます。顔は元の原型がわかりま
せんから判断基準には入りませんが、勘違いされるのも仕方ないで
すね。ですが、制服が全く違うのですよ」

ローレンは男の上着を預かり、そこにいるフットマンの制服と比
べるが何が全く違うのか、分からず首を傾げる。

「ここですよ」フットマンは上着のボタンを外し裏地を見せた。

裏地はついているものこそごく一般的なものだが、生地の合わせ
方が普通ではなかった。内ポケットの入り口を避けるように縫い付

けられ、何故か派手な糸でステッチが施されている。

確かにこれを知っていれば、男の上着を比較すると全く別のものと判断するだろうとローレンは納得した。

「こいつは完全な不審者なわけだな」

「ですね。物取りはたまたまに確保しますが、ご婦人が狙われたのは初めてです」

ヴィオロンが表情も変えず屋敷の現状を語るとローレンは驚いた。安全だと思い込んでいた場所が危ないのが普通だと言われれば驚かない者はいない。

「よくいるのか、こんなのが」

平和ぼけした言葉に当然だとばかり、ヴィオロンは答えた。

「街中に群れてある屋敷ではなく、こんな田舎にぼつんとある屋敷ですから、珍しい事は無いでしょう。しかも、王族の屋敷です狙わない方がおかしいですよ」

「警備は何をしている」

「敷地の入り口に数名配置しているだけですし、制服を偽造してまで入ってくるなら対応は無理かと」

実質的に行うとすれば、入るフットマンの上着を脱がし裏地チエックをすれば良い。ただ本当に行うのはナンセンスであり、裏地に何か在りますよと公言しているのと変わらない。

「対処は不可能なのか？」

至極当然な疑問と希望的な質問をヴィオロンになげかける。

「無理ですね。時間をくださればよき案を考えてはみますが」

一度は不可能だと結論付けるが、主人の『なんとかしろ』という意思を感じ取ってヴィオロンは意見を変える。

「そうしてくれ」

「ところでローレン様。東館の台帳を持って何処にお出かけでしたか」

男の上に乗せられていた台帳をローレンに渡す際にそれが自分が先ほど預けた簿冊の一部であることに気が付きヴィオロンは尋ねる。

「ああ。ダヴィードが昨日調度品を破壊したハズなのだが報告書がなくてな」

「東館なら破損報告はありえませんか」

即答である。ローレンが迷いのない言葉に疑問を抱くのは当然だ。

「特別に出す必要は無いとかか？」

「いえいえ。物が壊れることがないので。ダヴィードにご確認ください」

『物が壊れることがない』とヴィオロンは言うがそんな訳はない、現に昨日割れた音を聞いている。人の怪我ではないのだから、割れた物は元には戻らない。

ダヴィードが虚偽の報告を行いヴィオロンを騙しているのかと疑うが、彼が騙されるとは思えないためその考えを否定した。

ここで昨日の話をして音だけでは気のせいと捉えかねられない、物証を提示したほうが早いと思う。

だが、目の前の男を放置して東館に向かうつもりもなかった。

「彼の処理は終わってないが」

「これ以上は屋敷の主人の仕事です。私もこれに関してはブラディミル様のお帰りをお待ちするだけです」

ここからはローレンの仕事はもうないのだと言葉で表わされると迷う物がなくなり東館へ向かった。

そう、ローレンはこの屋敷の使用人でしかない。

「昨日、壊れた物？ 何の事だ」

東館の監視者は明らかに視線を合わせないようにしているため、何か隠し事をしているようにしか見えない。

「昨日応接室で割れる音を聞いた。だが破損報告はあがっていない」
核心を突いてやろうと続けざまに質問をする。

「壊れてないんだし破損報告はありえないだろ」

「ちょうど台帳整理中だ、管理物件をすべて確認させてもらおう」

煙がないのだから、火もあるわけがないと主張するダヴィードに台帳を見せつけ許可を取る。拒絶したとしても強制執行するわけだが、ローレンなりの礼儀である。

「かまわないが、無駄な点検になるぜ」

飾つてある品、保管してある品、使われている品、目視して台帳と照らし合わせる作業。時間は多少食うが躓かなければスムーズに進む作業だ。

予想していた欠損は何もなく、スムーズに作業は終了した。

調度品はすべて台帳通り揃っていた。

何一つ欠損することなくあった、全くの予想外である。

「ほらな、無駄な点検になっただろ」

「無駄な点検はない」

そもそも点検という言葉の意味が理解されていないような嫌みだ。

「全て台帳どおりとなると、昨日の音は一体」

確かに台帳通りに調度品はあった。未報告の物品の確認も同時に行っていたため隠された物は無いと考えられる。

昨日は偶然にも未報告の物品が破損したのだろうか。

「ぼっちゃんの気のせいだって」

おそらくそう言われて笑われるだろうと予測した台詞をダヴィードは言った。

「お前は予測した通りに動くな」肩を落としてポツリと呟くとダヴィードの肩越しに作業するフットマンが見える。

彼の頬は青く腫れていた。顔がすべての（といっても二言はない）フットマンの顔に青痣が付いているのはどうなのだろう。

「彼の怪我は作業中の事故か、それともお前の知らない事か」
「彼って」

ローレンが指差す先にいるフットマンを見てダヴィードは固まってしまふ。きつと彼にとって良くない指摘なのだろう。

「ぎよ　ぎぎよ　む中の事故だ。あいつはどんくさいから顔に鈍器が当たってな。顔が命のフットマンが顔に傷つけたら意味無いもんな。奴も真剣に仕事してるし、傷も多分治るからクビは勘弁してやってくれよ」

そう言つてフットマンから意識を反らそうとローレンの背を押して回れ右。

「別にクビなど考えていない」

ローレンがダヴィードに反論しようとする、ガシャーンと昨日と同じ音がする。青痣のフットマンが壁にかけてあった皿を落としてしまったようだ。

自分達の目の前での破損事件である。これは弁解しようが無い。

「あら、ダヴィード様」

壊してしまった事を焦る訳でもなくのんびりとした口調でダヴィードに声をかける。

音がして振り返つたダヴィードは「お前またやったのか！！」と怒鳴りつけた。

ダヴィードは『また』と言った。

「気をつけたつもりなんですけど、まあラベルを呼んできます」

「ああ　ま、までダメだ呼ぶな」

ふりかえればローレンがいる事に気がついたダヴィードは彼の提案を却下する。

「でも、時間が経てば直らないですから」

そう言い残して、ダヴィードが却下しているにも関わらずフットマンは彼方の方に駆けていった。

「どういう事だ？」

「な、何でもありませんよ。割れたと勘違いしてるんじゃないのですよか」

先程までと違い下手な棒読みの敬語を話すダヴィードは、誰の目にも隠し事が有るのは明白だった。

二人の目の前の床には割れた皿が散らばっている。

これを割れていないとは言えないだろうと無言でダヴィードを見つめるが、彼は無言のままその皿を見ないようにしていた。

そうこうしている間に先ほどのフットマンが別のフットマンを連れて戻ってきた。彼がラベルなのだろう。

「だからダメだって」

「時間がないんです」

帰ってきたフットマンとダヴィードが言い争う。

普通フットマンは管理されている立場なのだから、ここまで逆らうのは問題なのではないだろうか。その光景を見ていてローレンはふとそう思った。

これからラベルと呼ばれるフットマンが行おうとしている行為は東館の使用人とヴィオロンしか知らない。主人にさえ知られていない隠し事をローレンに知られては問題になるとダヴィードは拒否するが、時間がたてばその行為自体が意味が無くなると理解もしていた。今すぐするか、しないのか、どちらのリスクが大きいか考えだしたら頭の中が整理できなくなる。

自分のフットマン達はそんな考えも気にせず後者を心配し、先に進めようとしていた。

「ああああ。めんどくせえ。ぼっちゃん他言は無用だぜ、始める」

短い時間に、葛藤がダヴィードの頭をパンクさせる。

「後、動くな」と付け加えると、皿を割ったフットマンの側に歩いていった。

ラベルと呼ばれたフットマンは床に何かで円を書く。幾何学的な模様と何処かの文字らしき模様。その上に割れた皿と破片が並べられる。

「今日は逆だからな」

そう言うつとダヴィードは持っているケインで皿を割ったフットマンを殴り付けた。低い男のうめき声と共に口からは血が吐き出される。

少し殴ったぐらいでこんなに出血するだろうかと疑問を抱く量の血液が彼の口から床に落ちると、溝が掘ってあるかのように、まっすぐ細い線で円に向かっていった。

「明日もやったら死にますよ」

「むしろ、死んでこの雑な行動を治せ」

ラベルとダヴィードが話をしている間に破片は元の皿になった。

皿が無事に元に戻るのを見届けると、皿を割ったフットマンは口を抑え、奥に引込む。

ダヴィードが『また』といったことと、ケインで殴りつけて出血したことから、おそらく昨日の割れた物もこうやって修繕されたに違いない。明日になれば彼の顔には双方に青い痣ができるだろう。「ヴィオロンが言っていた意味はこういうことか」

確かにこれならば壊れる事はない。破損報告書も要らなければ、台帳から品が欠損することもない。

「なんだヴィオロン様はぼっちゃんに教えてるのかよ。聞いてるんなら言えよ焦ったじゃねえか」

「お前に聞けと言われたただけだ。しかし、これはすごいな」

「ぼっちゃんって動じない人なのか？」

「？」

ダヴィードの言葉の意味がわからないため首を傾げる。

「びっくりするだろう。怪奇だぜ？」

「怪奇なものは初めてじゃない。これは誰の奇跡だ」

動じないの意味が理解できると、目を伏せて思い出すように『奇

跡』と言葉にする。人間には到底達することが出来ない技術は全てローレンには奇跡としか受け取れない。

彼が知っている奇跡は代償に命を削って願いを叶えるものだ。目の前の皿も、誰かが命を削って行っているのなら注意する必要があるだろう。

「奇跡には違いないが、錬金術って呼ばれる魔法だ」

「錬金術は魔法じゃないですよ」

偉そうに答えるダヴィードにラベルが訂正する。

「錬金術といえば、金を作れる技術か」

聞き覚えのある言葉に、昔、文書で読んだことがあると記憶を引っ張り出す。

「金は現実は無理ですが、彼の体液を元に分子を再構築したんですよ」

ラベルはにつこり笑うと割れた皿を元の場所に戻した。

体液は、彼の口から出たもの血液だの唾液だろうと予測はつくが、皿の分子を再構築などと話をしてローレンにはさっぱり理解出来ない。

「言っても理解できねえって」知ってか知らいでか、ダヴィードが偶然にもローレンの心中を代弁する。

「セーヴァ様のご子息にご理解できないなど、失礼ですよダヴィード様」

ラベルは、ダヴィードの言葉に軽く笑うとローレンの父の名を語った。父と自分の事を知っている人間がいる事に正直ローレンは驚いていた。

「ぼっちゃんであの科学者の息子なのか。てっきりどっかの貴族が落ちぶれたのかと思ってたぜ」

「父の名は、そんなにも有名なのか」

兵器開発の科学者の名前を直接の関係者であれば知っているのは仕方ないが、一般市民に見えるフットマンにまで知られているとは予想外だった。良い意味での有名ではないのは間違いないだろう。

「知らない奴は居ないんじゃない？」

知らない奴は居ないという言葉が、心に引つ掛かるが父の罪に関しては何度も聞かされてきた事だ。ダヴィードなど国まで滅ぼされているのだから、彼らが憎むべき存在だと認識していておかしくない。

「ここでも咎め立てられるのかとローレンは言葉を失う。

「ん。もしかして俺が逆恨みして知っている　とか思ってなくない？」

黙ってうつむいてしまったローレンに焦ったように声をかける。言葉さえ発しないが、反応し顔をあげたのが肯定と判断した。

見上げたローレンの不安な瞳がダヴィード達を見つめる。彼は男なのだから確率は低いが、今にも泣き出してしまいそうな表情がどうしたら良いのだろうと心をざわめつかせる。

下手な言葉はローレンを傷つけやしないかと先程の質問の続きが口に出せない。ヴィオロンに目をかけてもらうには、ここで、溺愛する彼に距離を置かれては困る。

「あの、こんなことを言うのは何て言うか」考えにならない言葉がしどろもどろ。

「セーヴァ様を悪く言うのは無知な輩ばかりです。彼の設計した兵器は人智を越えてるんですよ。もしそれで危害があったとしても、発明者やその家族に怒りの矛先を向けるなどバカとしか思えません。ねえダヴィード様！」

上手く言葉に出来ないダヴィードを押し退けるように思いを伝える。最後に振られた言葉にダヴィードは「ああ」と間抜けな返事を返した。

「まあ、今のが正論なんだが。貴族ならお前の父上の名前は知ってて当然なんだよ。こいつも貴族の端くれだし当たり前前の知識かな」

「普通は家族構成も覚えませよ」

「いや、当主だけでよくね？家族全員名前と顔覚えてるなんて、気味が悪いだろ。役にも立たねえし」

「役に立つとかじゃないですよ。貴族のたしなみです。ねえローレン様」

ラベルはダヴィードに話を振るようにローレンにも同意を求める。

「あ いや僕は必要なかったから生憎」

「ほら、お前がおかしいんだよ」

ローレンの返事が自分の同意になったことでダヴィードはラベルを攻める。

「いや、他者を覚える才能は否定する必要はない。寧ろ今の業務に生かせばいい と思うが」

「イイコト言うね。ほら仕事しろ！」

まだ何か話をしたそうな表情で動かないラベルを追い払い、ダヴィードは言った。

「ベリラントの奴等が何て言うか知らないけど併合時は百年以上も前だ、セーヴァサマなんて居なかったんだぜ。銃剣でちゃんちゃか闘ってた時代だ。もしその兵器すらぼつちゃんの父上が作ったとしても、ラベルが言った通り関係ねえだろ。使った奴や命令した奴なんかの方が本来罪悪感を持つんだよ。だから、なんていうの」

目を閉じて一息吐く。

「気にするな」

これ以上の言葉が見つからなかった。

「一つ質問があるんだが」

なんだ、と口にはしないが表情で問うとローレンは続けた。

「あの皿はあの位置でないとダメなのか？」

質問は別の話と構えていたダヴィードは拍子抜けしてしまう。

「気にしてないなあ」そのまま、にやりと笑うと「お前が気にするなといったんだぞ」とローレンもつられて口角を上げる。

「皿は扉の左に飾られるのがこの屋敷では普通だな。なんか厄よけらしいぞ」

よくは分からないがと続ける。

「位置は変えにくいから 置き方が割れる原因だと思うが？」

よく分からないしきたりを勝手に変更した場合、後々痛い目に合う可能性がある。場所は変更しないで破損予防をすれば、後者の指摘になる。

「確かに、この皿は自殺願望が高いな」

先程のフットマンだけではなく、色んな人物に何度も再構築された経験があるのだろう。ダヴィードは皿を手にとり話しかける。

「いつそ壁に穴でも開けてはめ込むか？」

皿は扉の左側に少し出っ張った部分に置かれていた。皿を支えるのは茶色の縁に打ち込まれた鉄の足二本だけで、右側と左側を均一に保っているからこそ、その位置に収まっている。バランスが崩れれば直ぐに落ちる設計だ。

ダヴィードの言うとおり壁に四角にへこませて、簡易な棚を作るのが破損を防ぐ良策に思える。

「費用が気にはなるが、良い案だと思う」

「まあ。費用でいっちゃうとフットマン一人殴って済むんだから今のままがいい気はするな」

殴れば元に戻るのだから、コスト面ではゼロである。

だが、問題はそこではない。

「ヴィオロン様に相談かな。最終的にはぼっちゃん次第だけど」

まあ考えといてくれやと皿を元の位置に戻して言った。

「そういえば、お前の怪我は？」

昨日の音からして、割れた物は二つである。今のようにして元に戻したならダヴィードも顔に痣があってもおかしくない。

「俺まで破損させたのに気がついてるのか、ちゃんと代償は払ったぜ」

「いや、大丈夫なのかと」

口から出血させるのであれば殴り付けるのが効率的ではあるのだが、横顔からは痣らしきものは見えない。

「心配してくれてるのか、誰にも見せられない部分だけど、見る？」

人懐こい笑顔でローレンに近づくと上着を捲ってそう言った。「見る」と言えば服を脱ぎだしそうな勢いだ。

「いや 遠慮しておこう」

冷や汗を額に浮かべ表情を歪めると、残念そうにダヴィードは上着から手を離れた。

東館の秘密を理解したローレンはとりあえずヴィオロンを探すことにした。

破損報告が上がらないのはいいことだが、あの行為が倫理的にどうだろうと悩むからだ。ある意味処罰に近い事から作業員は気をつける様になる思惑があるかも知れないが、『また』直せば良いと注意散漫になっている様に思えるからだ。

皿という物質に本来与えられていない再生を施すという奇跡は、きつと何らかの形で代償が返ってくる そんな気もしないではない。ダヴィードなら、ちゃんと代償払っていると主張しそうだが。

「また、眉間にシワが寄ってるわよ」

後ろから声がかかる。ふり返るとヴェーラだった。

「真後ろからは見えないと思いますが」

とはいうものの、女主人の言葉を思い出して気持ち眉根のシワを無くそうと試みる。

「通りすぎた時に見たのよ。気づかなかった？」

先程の事もあり、余り関わりたくないかと首を横に振ると立ち去ろうとする。

「あ、まってまって」

方向転換したローレンの進行先を塞ぐようにヴェーラは手を伸ばした。押し退けたり、迂回するのもおかしいので仕方なく立ち止まると「なにか？」と尋ねた。

「えっと ありがとう」

ヴェーラが頭を下げる。

「お礼を言われる様な事はしていませんが」

北の廊下で見かけた時は結果的に見捨てた形になったし、夫人に秘密にすることも出来なかった。怒ったとしても感謝される事象があっただろうか。ローレンは皮肉ではなく素直に疑問に思う。

「ローレン様があー言ってくれなかったら今頃コウクナに戻されてたわ」

「危険だったのは事実なのだし戻ったほうが安全では」

むしろ戻ってくれた方が、お互いに平和に暮らせるだろうかと思いながら彼女の返しをおとなしく待つ。

「まさか、逆に姉様の傍にいなきゃって思ったわ。それとも追い返す？」

「貴女の存在は私の権限で如何こうできるものではない。ただ

」
「ただ？」

一度言葉にしようとして黙ってしまった台詞を促すように繰り返したヴェーラを見てローレンはため息をついた。

「ただ、叶うのならば。あの言葉遣いは僕の前ではやめてくれ」

頭を抱えて言葉を吐き出すローレンに、ヴェーラはにっこり微笑んだ。

「その顔であの暴言は心臓に悪い」

彼女も又、姉姪にそっくりなのだ。

男女関係なく誰もが守りたいと思う可憐な容姿。透き通る綺麗な声は歌姫として有名だった。

「大丈夫そのつもりはないわ」

その同じ声で語るの、彼女なら絶対言わない言葉。

だから、見た目が同じでも違うと思えるのだろう。

だから、余計な気を使わずに、正直に自分の気持ちを話してしまおうのだろう。

「正直、助けられないのは恥ずかしいと思っていたし。貴女の気分も害してしまった。

それに、エリン様である状況は、きっと誰も間に合わない」

「『あなた』っていうのなんで？執事も侍女も使用人だから敬語は
いらんないんじゃない」

「貴方はエリン様の妹姫です。それに」

「何？」

「先ほどまで『あなた』も僕相手に丁寧な言葉を、お使いでしたよ」

「だって、ヴァンダイーミル様のご友人でしょ」

ヴェーラの言葉に顔をひきつらせて「殿下は僕の友達ではない」と拒絶する。

「ふふ。そうなんだ。まあ同じ使用人どおし、硬い言葉は無しで貴方も様も要らないでしょ」

「それは強制なのか」

肩を落として彼女を見ると、大きな笑顔で言った。

「うん。守ってくれないとっつきり暴れちゃうかも」

彼女と彼女は似ていない。

だから、ローレンは表情を歪めていても

その言葉に従うのだろう。

「ところで、調べた結果はどうだったの？」

「男は外部の者だった」

調べると言われたのはほんの数時間前。彼女の調査はどんなものを指してるのだろうと疑問に思うが、ヴェーラの質問にローレンはわかっている事を述べた。

「屋敷のフットマンじゃなかったの。制服着てたのに？」

「あ、あれは偽装品だった。確認すると全くの別物だ」

ヴェーラもローレンと同じ様にあれはフットマンの制服だと判断した。

裏地の縫い方やステッチまで特注されているとは普通は思わない。

「そう あんなこと働いてる人がするわけないか。とりあえずは安心かな」

ヴェーラは嫌なことを思い出したように、目を伏せ呟く。声のトーンから不服さは感じられた。

「そうと言いたいが、殿下がお帰りになってない以上、男の処置は屋敷で拘留中だ」

「安心じゃないの？」

「考えすぎかも知れないが、一人戻ってこない＝成功と判断されると次が来る可能性がある」

思慮するローレンの隣で、ヴェーラの目が光輝いたのは気のせいではない。

「じゃあ、入り込む前に叩きのめす必要があるわよね。夜警が必要かな。私、ついていこうか」

叩きのめすうんぬんは考えていないが、少しの時間であっても、見回りが必要だとローレンも考えていた。

自分から言い出すのだから彼女は間違いなく腕に自信があるのだろう。そんな彼女がこう言うのだ、もし有事が起こって戦闘にでも

なれば、なんと心強い言葉なのだ　と喜ぶわけは無い。

「婦女子に守られる自分を想像して首を振る。」

「エリン様にご不安だろうから、エリン様と一緒に居てもらえると助かる」

女主人の名前を強調して、ヴェーラが嫌とは言えない様に話の方向をもっていく、彼女に守られるのが嫌という理由であれば笑い飛ばされて終わりそつだ。

「考えすぎじゃない」

「有事がなくても、気持ちの問題だ」

そつ。気持ちの問題である。

「で、ぼっちゃんは俺の安眠を妨害するわけね」

昼間上から眺めていた北の庭をローレンは歩く。その後ろからだるそつにダヴィードがついてくる。

「僕は一人で良いと言ったんだが」

ローレンの考えは、ヴィオロンが血相を変えて反対した。

「なぜ坊っちゃんが行かれるのですか」と大声で注意を受ける。呼び名が昔の『坊っちゃん』に戻っているあたり、相当冷静ではないのだろう。

「僕のワガママで見回りをしたいのだから、他の者に任せる気はない」

そつ言つて渋々納得させたのだが、ヴィオロンはダヴィードを連れてよこした。

「別に報告しないから自室に戻れ」

明日も通常通り応接勤務があることだろう、彼に余計な仕事を増やして眠る時間を削っているのは事実だと理解はしている。

「ぼっちゃんが一人で徘徊してるだけでも心配で寝られないんだよ。俺の安眠は、ぼっちゃんがおとなしく寝る事だ」

ダヴィードの口からは本音でない言葉がもれた。

ローレンの提案に喜んで帰ったとしても、ダヴィードの個室には

執事室の応接間を経由しなければ行くことが出来ない。

あんなに心配していたヴィオロンが素直に安眠しているとは考えにくい。たとえ報告されなくても、しっかり見つかることだろう。

「なんでお前まで心配するんだ。僕はそんなに役立たずなのか」
機嫌を取るために言った言葉がローレンの機嫌を損ねる。

「さてそれは見てないから解んないけど」

ローレンの実力は未知数だが、ヴィオロンにあれだけ心配されているのだ。こういった業務には全く役に立たないかも知れないし、ヴィオロンがただの過保護だという可能性もある。

「まあ 何かあっても守りきるから問題ないが」

ローレンに聞こえ無いように呟くと先に歩く彼を追いかけた。

屋敷の庭は恐ろしいほど広い。グラデイミルご自慢の庭師が作り上げた作品は、昼間なら美しいと鑑賞に値するが、夜警には邪魔以外何者でもない。視界を遮る作品を見てダヴィードは目を細めた。屋敷の敷地を囲うように壁が存在し、入り口部分は数名の夜警が存在するため、ローレンの心配は杞憂に思えるが、これだけ隠れる場所があれば見落としても仕方ない。壁だって乗り越えようと思えば出来ないことはないのだから。

「ぼっちゃんは何時まで見回るつもり？」

「一回りすればと考えていたが、見れば見るほど危ない場所だ。朝まで回らないと意味がない」

「やっぱり」

裏切らないローレンの言葉にダヴィードが見るからに残念そうに答える。ローレンはムっとした表情で「だから帰ってくれって言っただろう。お前に迷惑をかけるつもりはない」と吐き捨てるように言った。

「迷惑だつて分かっているなら、帰ろうぜ」

苛立つローレンの相手をまともにはせず、自分の意思を伝える。それで素直に帰るのならば今ここでこんなやり取りはしていない。

また振り出しに戻るのかという言葉を言う前にダヴィードが何か

に気がついた。

「あれ　なんだ？」

「なに？」

「あつちに明かりが見える」

ダヴィードの言う先を見ると、不自然に明かりが見える。

庭に灯る明かりならば、今の自分達が元々配置してある夜警のどちらかであろう。

「夜警の明かりが見えてるだけじゃないか」

「いや。夜警だったって門付近うるうるしてるだけだからな。あの方向に門はない」

二人が心配していた通り、不審者が敷地内に潜んでいる様だ。

「俺が見てくるから、ぼっちゃんはここで」

「いや、僕も行く」

思った通りの言葉にダヴィードは肩を落とした。

「聞いてなかったとか言われたら困るから、とりあえず言っとくけど、この屋敷に入り込むのは泥棒ばっかしじゃないんだぜ」

「」

「昨日、俺らがケインを持ってる理由を聞いたよな。護身用は冗談じゃなくて本気の話だ。俺とミハイールがヴラディミール様に雇われているのは、顔と血っていう理由もあるが、近戦術では間者相手に絶対負けない」

「間者　が来たのか」

「ここの屋敷じゃないが、ヴラディミール様だけじゃない、ポーラの王子様は皆狙われてるぜ。内からも、外からも」

外からは自分も襲われた経験から解らなくもない。ただ、内からもという言葉に寒気を感じた。

「さつきまでは、居るか居ないかどうでもいいお客様を探してたからぼっちゃんの好きにさせてたけど、居ると分かれば放置はできない。ぼっちゃんも近づけたくないのが正直なところだ」

「そんな話をされて、逆にお前一人になどできない。ただお前の仕

事の邪魔をする気はない、足手まといと判断したら気にせず放置してくれ」

「まあ仕事っちゃあ仕事だけだ」

ぼっちゃん捨ててまで完追させることじゃないんだけど心で思う。相手を捕まえて称賛されるかと思えば、そんなに甘くない世の中だ。ヴィオロンにこっぴどく叱られる上、間違いなく解雇であるう。

彼のローレンへの溺愛ぶりからして、叱られる 解雇程度で済めばまだ運がいいほうだ。

霧の国の技術を学び、彼に認められる為にこんなことに付き合ってる訳なのだが、解雇されては全く無駄となる。

「置き去りにはしないけどさ」

そう言っただけが良かった。『いま』ここで置き去りにするのも、連れて行って邪魔になったら放置するのも、結果論として同じだということだ。

ダヴィードの選択肢は一つしかないのだ。

近くに行くと明かりでは無いことが分かる。

明を取るために灯しているのではなく、木自体から光が漏れている、そんな感じであった。色もランプのような、緋に近い色ではなく白や緑に近い。

「リブジステイス か」

庭の手入れされた木々の中から滲むようにあふれ出る光に見覚えがあり、ローレンはつぶやいた。

「なんだそれ」

「いや、気にするな」

ダヴィードに説明するのが面倒なわけではなく、目の前の現象は何であるか未確定なためあいまいにしておこうと考えた。

リブジブテイスは、ローレンと昔の知り合いを繋ぐ光。

天国と呼ばれる場所に繋がる光である。そんな現象がこう簡単に

あるはずもない。

目指して歩いていると、光は消えてしまった。

「バレたな」

そう言うときダヴィードは、光が漏れていた木ではなく、それよりも左の方向へと走り出した。右側は開けており、死角から逃げ出したら目視できる。もし、誰かが居て逃げだすため灯りを消したのなら、ダヴィードが向かっていった方向か、または真つ直ぐ奥かとなる。

ダヴィードの動作を見て、ローレンは小さく恐怖を感じてしまった。今までならならしていたダヴィードが全く違う人間のように動く、それだけで事の深刻さが見に染みる。もし、本当に間者であったのなら、自分で対応できるのだろうかと恐れてしまうほどに。

「こつちには居ないか。ぼっちゃんそつち側に居るかも知れねえ。気をつける」

見えない位置からダヴィードの声が聞こえた。

もし間者が潜んでいたとしたら、そんな大声を出すのは得策でない。間者が逃げるのと、ローレンの安全を天秤にかけたら、後者を優先させたのだろう。

要らない助言がローレンの恐怖を煽る。

自分はこんなに弱虫だったか。

さらに煽るように後ろの草むらから音がした。声は出さないが、必要以上に驚いてしまった。近くにダヴィードがいなくて幸いだと心を落ち着かせた。

振り返って、音の元を目視するとローレンは止まる。

ダヴィードが側まで寄ると、ローレンと同じ様に、止まってしまった。

そこには、とても小さな女の子が座り込んでいただけである。

肺から酸素を絞り出すように息を吐きながら執事室の扉を開けた。固い表情のローレンに、抱かれた幼子は首を傾げるが声はださな

い。「おかえりなさいませ」

姿を見る前に声がかけられる。ダヴィードの予想通り起きて待っていたようだ。

「先に寝ていると思っていたが」

「ローレン様より先に眠る事はないですよ」

「お前にも迷惑をかけているんだな。すまない」

「そうです。以後夜警など適職の者を手配ください」

ヴィオロンは顔色変えずローレンと会話をする。

幼子はまるでそこには居ないかのように黙ったままで、ヴィオロンもそれに触れなかった。

「眠いと思うが、相談があるのだが」

ローレンは幼子を下ろすと、ヴィオロンに向けた。

「夜警中に拾ってしまったのだが、どうしたら良いものかと拾ってしまった幼子をヴィオロンは一瞥する。

「見た感じきちんとした身なりのお嬢様に見えますが、本日はお泊まりのお客様にお子様がいとは報告は受けていません。家出か何かでしょうか」

「あ、いや。身なりはエリン様の侍女に仕立ててもらった。多分殿下のお客様とは違うと思う」

「ダヴィード どう読みました？」

ローレンの話の聞き、幼子を観察するように上から下へ。発見した時に側に居たであろう部下へ状況報告を求めた。

「発見した際は衣服は身に付けてません。手術跡はなく、軽い外傷も少ないようです。言語が未発達なのからして単純に遺棄された様に思えますが、屋敷の庭にどうやって入り込めたかは謎です」

ローレンがヴェーラに手渡すまでの間、ダヴィードは幼子を観察していた。この年齢の子供であっても、間者であったり、本人は知

らなくても体内に何か植え込まれる可能性がある。

手術跡の報告はその為の物である。

「素性はさっぱりですか。処分したほうが得策ですかね。ローレン様も困ってる様ですし」

やけに冷たいヴィオロンの目が幼子に向けられる。いつもと変わらないのだろうが『処分』という言葉がローレンを震わせた。

「処分って 僕はそんな事頼んでない」

力を込めたら押し潰してしまいそうな幼子を壊れないように大切に抱き締める。

「パパア？」

幼子は不安定な体位を小さい手をローレンに回し、安定させた。

「パパ？ どういうことですかダヴィード」

自分の知らない事実を目の当たりにし、驚き訊ねる。

「彼女はぼっちゃんが父親と認識しているようです。ぼっちゃんは身に覚えはないみたいです」

ダヴィードがそう言うが目の前の擬似親子は見覚えがないという風に見えない。

「参りましたね」

「ヴィオロン」

懇願する目をしたローレンが名前を呼ぶ。

向けられた張本人はその瞳に一瞬たじろぎ、ローレンがいつもしているように眉間に皺を寄せた。

「この屋敷でひきとるとなるとヴラディーミル様とご相談していただかないと」

口元をひきつらせて、視線をはずす。本来ならば危険分子、屋敷の主も目の前の主もどちらともに危害を及ぼす可能性があるのならば排除したいと思うのが、使用人として当たり前なのだが その主が排除するなと懇願する。

卑怯ではあるが彼女の処遇は屋敷の主にはおろしおろし投げる事にした。

「やっぱり、ぼっちゃん次第なんじゃねーか」

端から駄目だろうと判断していた内容がローレンのお願いで何とかなる。そんな事実を目撃するとダヴィードは周りの人間に聞こえないようにこつそり言葉を漏らす。

ヴィオロンに何かさせたいのなら、ローレンを味方につけるのが間違いない。

「どちらにせよ。身元を調べさせて頂きます。よろしいですね」

「構わない。もしそれでこの誰かが分かれば家に帰れるだろう」

幼子を見てローレンはにっこり微笑む。彼女もつられて可愛い笑顔を返した。

ヴィオロンは隣でため息をつく。

「ヴラディーミル様は本日は、いえ、もう昨日ですか、おもどりになられません、もう夜も遅いですしお休みください」そう言ってローレン達を部屋に追いやった。

窓から差し込む光で朝になったことに気がつく。目が覚めてすぐのまどろみの中、自分がベッドの横で椅子に座りながら倒れ込んでる現状を何故だと疑問に思うがベッドの占有者を見て理解する。

自分のベッドには昨日拾った幼子が自分の手を握りしめて眠っていた。椅子に座ったまま寝たのは久しぶりで慣れない行為に体が痛い。

今朝寝ついた所なのに、ちゃんと目が覚めたのもこんな体制で睡眠をとったおかげである。

握られた手を慎重にはずし、几帳面にたたまれた上着を手に持つと部屋を出た。全く記憶がないが、着たまま寝たり投げつけたりすればシワになる、無意識の几帳面さに苦笑した。

「おはようございます。睡眠はまだ十分ではないでしょう」
部屋を出てすぐある応接室にはヴィオロンが居り、ローレンの姿を見かけると立ち上がって挨拶をする。

「お前もそうだろうに」
眠いと言われれば眠気が体を覆っているのを自覚する、少し気だるい。

「二時間も寝れば大丈夫ですよ」
いつもと変わらないヴィオロンはそんな気配さえしない。

そんなヴィオロンは座っていた場所にローレンを座らせると作業を始めた。屋敷の主がまだ帰宅していないため、昨日の様にモーニングティーの用意は必要ない。

とり急ぐ作業が無い主を眠気が襲う目の前に紅茶を差し出す。添えるジャムは昨日と同じ黒いジャムだ。

「良い匂い？」

与えられた紅茶と驚くほど好みだったジャムを愛でながら眠気を覚ましていると、足元から声がする。

「まだ寝ていればいいのに。僕らが起こしてしまっただけだ。」
声の主はベッドを占領していた幼子で、ローレンの言葉に首をふった。

逃げ出さないようにローレンを捕まえたつもりなのか、上着の裾を小さな手でにぎりめしている。可愛い彼女を自分の隣に座らせる。と新しいカップに紅茶を注ぎ、ミルクで濃さを調節する。彼女に合ったカップがあればよいが、あいにくこの場には普通のソーサーとカップしかない。

幼い子供に自分と同じ濃さの紅茶を与えるのも気が引けて、これがサモワールなら湯を足して薄められるのにとティーポットを睨み付けた。

彼女はカップにミルクが描く渦巻きが楽しい様子で、上から見ていてもわかるぐらい目を輝かせていた。味にしる、ミルク独特の甘い香りにしる、この光景にしる、紅茶にミルクも良いのかも知れないと屋敷の主の好みに感謝した。

グラディーミルに許可をもらえたと仮定して、これから彼女の面倒を見るのであれば専用のカップがいるなと夢の狭間でほのぼのと考えてみた。

目が覚めると、ベッドの上だった。

先ほどまで応接室で紅茶を飲んでいた気がしたが あれは夢だったのだろうか。

上着は几帳面に折り畳み、机の上に置いてあった。今朝見た光景と同じである。違うのは彼女がベッドに居ない事。

もしかして、幼子を拾った事も夢だったのかと、上着を持って部屋から出る。夢の中で紅茶を飲んだ場所には、飲み残したミルク入りのカップだけが置いてあった。

幼子と一緒にモーニングティーを飲んだのは現実だと残された力カップが告げている。

ポットとローレンが使ったカップがないのは誰かがかたづけしたの

だろう。その誰かが自分を寝室に連れていったと思われる。

では、幼子は一体どこへ行ったのだろうか。

背中を嫌な汗が伝う。

今朝幼子が握りしめていた上着の裾を同じ様に握りしめ部屋を飛び出した。屋敷の中はあまり詳しくないが、思い当たる場所を探すしかない。

ローレンはまず夫人の部屋に向かった。昨日彼女を飾り立てたのはその部屋の侍女である。

もし、昨日の道筋を覚えているなら、たどり着けたなら、だれかに探してもらうのを新しいドレスを纏って待っているかも知れない。

「報告！」

ヴェーラの第一声はそれだった。

夜中に子供を拾ったのだの、着替えをさせるので迷惑をかけられたのだから、彼女の今後がどうなったのか教えてもらいたいと思うのは至極当たり前の権利である。

ローレンとて良い報告なら喜んでほしいものだが結論があいまいでしかも今はそれ所ではない。話題の娘が居ないのだ。

「すまない。そんなことよりも、あの子はここに来てないか？」

「そんなことよりもって、て？いなくなっちゃったの？」

自分の質問が軽んじられた事を抗議しようとして、開けた口が驚きの言葉を吐き出す。

彼女の驚いた言葉でここに居ないことだけが分かった。

「朝、目が覚めた時は居たんだが気がついたら姿が無くて」今にも泣き出しそうな表情でローレンは訴える。どれだけ悲壮なのだと思鹿にする前に、その彼の仕草にヴェーラは心臓を握り締めたような痛みを覚える。心臓など握り締めたら直ぐに命が尽きてしまうだろうけど、今の痛みはそれくらい一瞬で、それくらい痛かった。

「昨日お話してた子ね。ヴェーラお探しするのを手伝ってらっしゃい。ローレン様ご心配でしょうに」

ローレンとヴェーラの話の後ろで聞いていたエリンは同情する。

「でも、お姉様のそばを離れるのは　ねえ」

昨日あのようなことがあったところだ。姉を一人にさせる予定は全くなかった。

ただ、目の前のローレンもこんな表情のまま放置しておきたくなくて、早く彼女の姿を確認させてあげたいと思っている。

「大丈夫。デーマ様の剣が側にありますから」

当てになるのかならないのか分かりにくい物でエリンは安全を訴えた。顔は自信に満ち溢れているため、当てにするつもりなのだろうが。

ヴェーラは『一緒に探してあげたい』という気持ちで勝っていたため、否定的な意見は出さず、素直に姉の配慮に感謝した。

ただ、少々心配は残る。自分か屋敷の主が戻るまで部屋から出ないように言いつけると部屋の鍵をかけた。

「あら、閉じ込められるのね」とエリンは何故か嬉しそだった。が、「私も実はこの屋敷、あんまり知らないのよね」

ローレンと幼子を早く会わせてあげたいとは思っても、ヴェーラとどこから探せば見つかるのか全く見当がつかない。

「となると　ダヴィードに聞いてみるか」

彼女のことを知っているのは、ヴィオロンとダヴィードだけ。何処に居るかわからないヴィオロンを探してだすよりは東館にいると思われるダヴィードの方が手間が省けると思い、次の選択肢とした。だが、東館にはダヴィードの姿は見当たらない。

この二日間で見知ったフットマン達が遠くで頭を下げるが、質問をするまえに逃げ出すように作業に戻ってしまう。

「ローレン様どうされました？」

作業を中断させる必要があるかと悩んでいると、背の高いメイドがローレンに声をかける。彼女の手には傷を隠すためのドレスグローブがしっかりと装着されていた。

「あ、申し訳ございませんエリン様とご一緒でしたか」

ヴェーラを夫人と勘違いし慌てて、後ろに下がる。
フットマン達も恐らくこれに気を使ったようだ。

「気にしなくて良い。彼女はエリン様じゃないから。それより。ダ
ヴィードは居ないか？」

メイドは疑問を表情に浮かべるが「ダヴィード様は、朝いらつし
やってから、そう言えば、それからお姿を見てませんね」質問され
た内容を違える事なく回答する。

「そうか、なら君で構わない。朝から今までの間にこれぐらいの金
色の長い髪の子は見なかったか？」

幼子の背の高さを手の位置で表し、慌てた口調で簡単な特徴を伝
える。

「本日のお客様では、幼い御子様を連れられた方はおりませんでしたの
で、記憶にございませんね」

「申し訳ないが、見かけたら僕に教えてくれ」

二日前に初めて会った時の様に、意識に余裕は感じられないロー
レンを心配そうにメイドは顔をのぞきこむ。

「大切な子なんだ」

ローレンはエリンの部屋で見せた悲壮な表情でそう言つと、メイ
ドは静かに笑い「かしこまりました」と頭を下げた。

頬がほんのり紅いのに気がついてヴェーラは少し苛立つ。

「ここは彼女に任せて他を探しましょう」

「ああ」

袖を引いてローレンの方向をかえる。

「エリン様。ローレン様。おはようございます」

ミハイールにしては珍しくぼんやりとしていた、生気の抜けた様
な表情が気味が悪い。

「ミハイール。ここで小さな女の子を　あつ、と長い金色の髪で
これ位の大きさで」

挨拶よりも先に用件を伝えるが、今の内容で特定は出来ないだろ

うと別の容姿を伝えようとするが、特徴をつまぐ言葉に出来ない。

「ローレン様も見たのですか！」

興奮気味の声を張り上げる。

「見たのか！」

つられるようにローレンも聞き返す。

「ええ。私はここで天使を見たのですよ！」

「は？」

喜び予定が狂ってしまう。嬉々とした、ミハイールが言う想定外の言葉にローレンとヴェーラは口を開けて声を漏らした。

「ほらこの絵！」

ミハイールが指差した絵画には湖の畔で貴婦人が子供たちに絵本を読み聞かせている絵だ。

「彼女はじつとこの絵を見ていました」

「この天使の女の子。確かにあの子に似てるわね」

ヴェーラが指差した女の子はよく見れば背中に小さな羽を持っている。金色の長い髪と、白いドレスが彼女と特徴が似ている。

「顔が全然違う」

ローレンが不服なのは、自分の事をパパと呼ぶ幼子は可愛く、絵の中の天使はふっくらしていて一般的には可愛いと形容される姿ではない。

「まあ絵の中に見つけてもしょうがないんだから、で、その天使様は何処に行ったの？」

「あちらに向かつて走って行ったのですが、見失ってしまっ」

まるで絵の中から出てきた様な容姿に呆けて見ていたのは数秒。

慌てて彼女を追うが、見失ってしまった。絵から出てきたのなら、絵の中に戻ったのかと元の場所に戻りぼんやり絵を見つめていた時にローレン達が視界に入った。

「この絵から逃げだしたのなら、戻っては来ませんね」あれは白昼夢などではなく、ローレンは彼女を探している。自分ももう一度会いたいとミハイールはフットマン達に少女を探すよう指示をした。

指示の内容は異様で、フットマン達が表情を歪めると横からヴェーラが口出しをする。

「メイド達にも声をかけておきます。エリン様」

フットマンの中でも、一人目立った男がヴェーラに向けて挨拶をする。

依頼者のローレンに言わないのは仕方ないとして、直接の指示者のミハイールではなく、姉と勘違いし自分にアピールしてくる様は、自分は有能だよと女主人に媚びている態度に見えヴェーラの機嫌を損ねた。

「ミハイール様が必要だとお考えならばお願いしますね」と満面の笑顔で返す。

顔は笑顔だが『勝手なことするな』と釘をさしたつもりだ。勘の良い人間なら自分の提案を却下された事には気づく。

相手は、勘の良い人間だったらしく、悔しそうにミハイールに指示を求めに行った。

「一体何処に行ったんだ」

自分だったら何処にいくだろうか？まだ何も知らない幼子の気持ちになつて屋敷を歩いてみた。

ヴェーラとミハイールはついてくるが、二人も情報がないため見つけるに至る場所へ案内できない。

屋敷の中をぐるりと回つても幼子の姿はおるか、見かけた者も居なかった。

ミハイールが嘘をついていなければ、彼だけが目撃者だ。

ローレンはため息をつきながら庭の方を見る。庭には犬らしき獣が走っていた。その後を大柄の男がついていく。

あんな怖い状況で庭にいるはずが無い。ならば屋敷の何処に居るのだろうと表情を暗くする。

本当の親子でもないのに、目の届く場所に居ないだけでこんなに不安になるのかとヴェーラは思ったが、悲壮なローレンの表情に放

置はしておけない。姉をほおりだして付き合ったのだ、見つけるまでは側に居ようと思う。

「もしかしたら部屋に帰って来てるかも。一度戻りましょう」
部屋とは無論執事の彼らが寝る部屋だ。

探されている彼女は、ローレンの部屋を出たあと、応接セットに座っているローレンを見つけ、一緒に甘い匂いの飲み物を飲んだ。お話をしようとして、顔を上げるとローレンは眠っていて少し退屈だ。ただ、頭の上へのせられた手は暖かくて退屈だけこのままでいいと思っていた。眠っているパパもしばらくすれば起きるだろう。

「ローレン様　寝ておられるのですか」そう言っただけで現れたのは、昨日自分を睨んでいた男だ。

男は、机の上のカップとポットをかたずけるとローレンを抱え上げ、奥の部屋に連れて行ってしまった。

ここには、自分とローレンが入れてくれたミルクティーの入ったカップだけが残される。

本当に退屈になってしまった。

だから、探険しようと思う。

男に見つかったら、パパの様にさらわれてしまう。もっと退屈な場所へ連れていかれるかもしれない。幼子は首を振ってソファアーカー降りた。

廊下に出ると綺麗な物が沢山飾ってあって、見ているだけで退屈は解消されていく。本当は触りたいけど背が届かなくて諦めた。

そう言えば、綺麗な男の人にも出会った。一つの絵を眺めていると、びっくりしたようにこちらを見て固まっている。

自分がここにいるから驚いている。だから、パパを連れていった男に言いつけられるかと思い、逃げ出した。

階段を降り後ろを振り返ると彼はついてくる、見つからないように角を曲がった所で開いていた窓から飛び出した。

窓枠から飛び降りた時に尻を打ち付けた。白いドレスも少し汚してしまっただが破れなかっただけ良かったと胸を撫で下ろした。

ワンワンと遠くから音が聞こえる。音はだんだん近づいて行き、空気が震える位大きな音になると、目の前に黒いモジャモジャが現れた。モジャモジャの目付きは鋭く、あの男にそっくりだった。

だから怖いと感じた。

遠くに走って逃げるのは間違はなく無理だと判断し、後ろの植え込みに入り込む。ここは沢山の木が壁のように生えていて、逃げるには適していた。背が小さいから回り込んで惑わすよりも、くぐり抜けて直進すれば大きい相手を巻く事ができる。

黒いモジャモジャは思った通り抜ける事が出来ないようで、声はどンドン遠くなっていく。

後は追い付かれても大丈夫な様に相手の届かない所に逃げるだけ。

木の上で幼子は困り果てた。

いくらため息をついても、いい案なんか出てこない。

思惑どおりモジャモジャは届かない相手に飽きて何処かに行ってしまったが、自分が降りられなくなってしまったからである。

屋敷は良く見えるのに、あそこに戻る方法がない。

パパはどうしてるだろうか。朝いれてもらった飲み物も残してないし、出かける旨も伝えていない。

昨日出会ったばかりの自分が勝手なことをして、怒っているだろうか。

パパがああ男の様に睨み付ける。自分はこの場所にはいられなくて、とても退屈な場所へと帰らなければならぬのが悲しくて、声は出ないけれど瞳から、涙を流した。

「どうかしましたか？」

下から声が聞こえる。

誰かが自分が困っている事に気がついてくれたのだろう。

誰かに捕まりたくなくて逃げ出したのに他の誰かに助けを求めて捕まるのはどうだろうと悩んで隠れてみた。

「降りられなくなったのかな。元気な方ですね」一度見つかったから隠れても手遅れだということに、幼子は気づかず、続けられる優しい言葉にびっくりして顔を覗かせた。

木の下では、屋敷の主がにこにこしながら上を見上げていた。

幼子を降ろそうとヴラデーミルはすると木に登り、あつという間に同じ幹まで登ってくる。主は紳士が淑女に差し出すように手を出すと、乗せられた幼子の腕を掴み体を引き上げた。優しく抱えられると地上に下ろされる。

「大変失礼ですが、貴女は何処のお嬢様でしたか？」

聞かれた言葉に屋敷の方を指差すと、ヴラデーミルは困った様に笑う。

「まあ。ミハイールに聞けばわかるだろう」

手を引いて屋敷方へ歩み始めると、前方にダヴィードが現れた。

「ダヴィード良いところに。お前はいつもいいタイミングで現れるな」

笑顔を張り付けたヴラデーミルは、機嫌の良い声を上げた。

「なんだよ、帰ってるなら帰宅した事伝えてからウロウロしろよ。」

ヴラデーミルサマ あ

眠い頭にヴラデーミルの声は辛い。機嫌の悪そうな声は、連れている幼子を見て止まる。

「お前、知っているのか。お部屋まで送って差し上げろ」

ホントにいいタイミングだなあと一言漏らすと「それでは私は用がありますので」と彼女にあいさつをする。

「はあ」知っては居るが、彼女の部屋など無い。ヴラデーミルは客の連れと間違えているのだろう。ダヴィードは彼女をヴラデー

ミルから預かると屋敷に向かう。

「ぼっちゃんはまだ話できてないみたいだなあ。それにしても、あいつ。お客の顔と構成ぐらい知つとけよな」

黙ってついてくる幼子の歩幅に合わせて、歩くスピードを押さええる。

「ねえ。さっきのヒト、お腹痛いの？」

幼子は思い出していた。先ほど木から降りしてもらった時に、ヴラデーミルの一瞬手が止まり一息つくように漏らした息を。彼は表情は笑顔だったが、うつすらと額に汗がにじむ。パーシヤを無事に降ろした際に左の脇腹を押さえていた。痛かったのではなく、癖かも知れない。額の脂汗は気のせいでないと思う。

助けてくれた王子様を心配し、側にいる彼に聞いてみた。

「なんだ。苦しんでたか？」

ダヴィードの問いかけに首をふる。

「だろうな　あの人は他人に弱みなんて見せない。特にお前みたいなちびっこに」

「ちびっこじゃないの」

「　間違った表現はしてねえ」

幼子の身長はダヴィードの膝ぐらいである。ちびっこで間違いなのだが、彼女はそう言われたくないらしい。

「まあ、ちびっこにバレルんなら危ないのカモな」

危ないとの言葉に、口を開けて驚く。何か言いたい幼子の頭をポンポンと叩いて「だから、後で様子見に行つてやるよ。まずは、ちびっこをぼっちゃんに届けてからだ」とダヴィードは納得させるように言った。

執事室では、悲壮な表情のローレンがヴェーラとミハイールに慰められていた。その姿からは絶望が漂っている。

「ほら、パパがいるぜ」

ダヴィードが苦笑いしながら、幼子に言つと彼女はローレンに向かって走っていった。

「パパア」

大きな声で入口から走ってくる幼子を見てローレンは無事なのを確認する。

顔や手が少し汚れ、ドレスの所々が傷んでいるようだが、走つてこれるのだから幼子自体は元気だ。体当たりするように飛び込んでくる彼女を大切に受け止める。

面倒くさそうに、その後ろをだらだらと歩いてくるのはダヴィードである。

「迷子のお届けだぜ、ぼっちゃん」

「ダヴィード。ありがとう」

安堵からか、体の力が抜けダヴィードにもたれ掛かるようになる。かかる。

本当は自分の手柄では無いのだが、ローレンが勘違いしているだけで大勢に影響はないと判断した。それに、説明が面倒であった。

「ありがとう」

顔と手の汚れを落とし、少しほつれた洋服を着せ替え、乱れた髪を解かしていると鏡の中の幼子が笑顔で言う。ヴェーラはその言葉に笑顔で返した。

彼女は確かに可愛らしい。つい笑顔をこぼしてしまう。

大切に抱き上げたり、顔を青くして心配し探し回る。その態度は、何処から見ても保護者にしか見えない。

本当に昨日拾った子供なのかしら？と疑問に思う。

先程の態度は、可愛いからと言う理由だけでは、上手く解釈できなかった。

「おまたせ」

男三人が待つている、執事室に自分の自信作をつれて入る。

絵画の天使さまを待つているミハイルには悪いと思ったが、ドレスの色は白を選ばず、彼女の髪は軽く結び上げた。代わりに細長いリボンをたらしたのが、うごくたびヒラヒラ揺れて可愛いと思うのだが、男性陣はどうだろうと思う。

これだと先程の絵画とシンクロしないだろう。ローレンの態度は馬鹿らしいと思ったが、確かに彼女と絵画の天使さまは違う。

自分が仕上げた鼻肩目を差し引いても断然こちらの方が可愛い。

「パパア」

一番始めに誉めてほしくて可愛い幼子はローレンにかけよる。リボンがヒラヒラ舞い上がるのが、後ろから見ていてかなり可愛らしい。

パパもパパらしく、可愛い娘の登場に、にこにこが止まらない。

他方から見ていて、幼子とて、知らない男を「パパ」と呼んで慕うの姿がも昨日会ったばかりとは思えない。まあ彼女の場合は勘違いしているとローレンも言っていたので、間違えているのだからおかしくはないのだろうが。

ミハイルはそのふたりを幸せそうに見ている。彼も天使に会えて嬉しいのだろう。

「パパ。ダヴィードは」ローレンに頭を撫でられて満足すると、回りを見回して幼子が言う。確かに姿がない。

「用事があるとかで、ここにはいない。どうかした？」

ダヴィードを気にしている幼子にローレンは眉を潜めるが、不快感を彼女にぶつける事はない。「ならいいの」につこり笑顔で答える。

「さすがにダヴィードの名前は知ってるのね」

「ヴェーラの事も知ってるのよ」

首を傾けて上目遣いに笑う。馬鹿にした態度だが、彼女がしているだけで可愛いと思えるのはなぜだろう。

ヴェーラは魔法にかかったようにただ嬉しくなる。

「名前教えてくれたの？」

「いや 全く」

ローレンも驚いていた。自分以外に名前を聞いていたとしても、彼女をヴェーラだと気づく人間は何人いるだろう。ほぼ皆無であるため幼子がどうやってヴェーラの名前を覚えたのが疑問に思う。

「なら、嬉しい。覚えてくれたのね」

「教えてもいないのに、よく覚えてなあ」

無意識のうちに寝める言葉とともに利き腕が幼子の頭に伸びて、柔らかい髪をなでる。嬉しそうに彼女は眼を細めた。

「ミハイールの名前も知ってるのかな」

「ミハイール。知ってるのよ」

得意げに名前を繰り返すが「ヴェーラ」の言葉を繰り返したただけだな」と、気づかれてしまう。

「まあでも。人の会話を聴いて覚えるのよ。頭いいわね」

「ローレン様。彼女の名前はなんと言われるのでしょうか」

「名前？そういえば知らないな」

「不便じゃなかったの？」

「あなたの名前はなあに？」

「僕の名前はなあに？」

ヴェーラが問うと幼子はローレンに尋ねる。

「名前は知らないのか」

「僕ってのはパパの真似ね。じゃあ、パパに付けてもらわないとね」
ローレンの真似をして僕と言う女の子が可愛くて、ローレンがするように頭を撫でると大事な使命をパパにふった。

「え、女性の名前など、思いつかないのだが」
「え、女性の名前など、思いつかないのだが」
使命された本人は眉をひそめて拒絶する。

「名前無いと可哀想でしょ」当然、彼には拒絶する権利はない。

「スラーヴァ　とか」

以前に面識のある女性の名前を思い出す。ただ、直接は名前を口に出せずに名前をもじった愛称を声に出した。

「それは、他の人の名前でしょ」

とても不服そうに抗議の声を上げた。

「気に入らないみたいね」

「セロスラーヴァは有名ですしね、他人とかぶるのは嫌なんですよか。じゃあ、女神の名前でディアーナとかは、綺麗ですよ」

ミハイルの名前に首を振る。

「お花の名前でリーリヤとか」

ヴェーラの名前にも首を振る。

「小さいお姫様はワガママだな」

いつの間にか戻っていたダヴィードは二人の意見が撃沈する様を他人事のように見つめ、二人の気持ちを代弁する。

「大体、名前なんて個人が特定できれば良いんだから、そこいらのワインのラベルとかで良いだろ」そういいながら、テーブルに飾るように置かれたワインのラベルを指差した。それには異国語で『墮者』と書かれている。

「とんでもない、駄目ですよ。女の子につける名前じゃありません」慌ててミハイルがワインとダヴィードの間にさえぎるように入り注意する。よりもよってなんて名前のワインが置いてあるのだと苛立っていた。

「　　パーシヤは駄目かな」

昔の言葉で『小さな』を表す言葉から作った愛称を、尋ねるように聞いて見ると、了承の言葉の代わりににっこりほほ笑んで抱きついてきた。

「良いみたいだな。ぼつちゃんの娘だから『パーシヤ・ローレノヴァナ』になるのか、言いづら　」

ダヴィードは嫌そうな顔をして舌をだす。見える刻印にローレンも嫌そうな顔をした。

「舌」

「はいはい。ぼっちゃんは厳しいな」

「ろれーね、な？」

パーシャはダヴィードの言葉を繰り返したが、正しく発音できない。

「パーシャは僕の娘ではないし、僕の名前は付けなくていいよ」

自分だってセーヴアの息子だと名前で名乗った事はない。父称など、自分にとって嫌がらせ以外何でもない。パーシャにも、自分の名前を名乗らせる事でいつか迷惑をかけてしまうのではないかと不安になるのだ。

少し日が暮れると屋敷の主が帰ってきたとヴィオロンに言われ玄関ホールにローレンは向かう。本当は昼前には一度屋敷の敷地内にいたのだが、それを知っているのはごく一部の人間だけである。

「お帰りなさいませ」

ローレンは玄関ホールで屋敷の主を迎えると顔色を伺う。意識せずともそうしてしまうのは後ろめたさがあるからに違いない。

「どうした体調でも崩したか？」

きつと誰も気づかないような不安を察知してヴラディールは問う。

「体調は悪くは無いのですが、少し殿下にご相談が」

野生動物の本能の様な勘の良さを感謝して、ローレンは本題を切り出そうとした。

「ヴィオロンでなく私にか」

何故そこにヴィオロンの名前が出てくるのだろうかとうと首を傾げるが、今はそんな事はどうでも良い。

「殿下にしかお話できない事です」

その言葉に満面の笑みを浮かべヴラディールは自室に向かう。

ローレンの相談事は自分だけにしか打ち明けられないものなのだから、自室に二人きりで話す必要があるだろう、そう考えて歩く足を

早めた。

「で、彼女が相談事？」

ローレンを盾に隠れるように此方を見る少女。

「パーシャ、隠れないで。ヴラディーミル様にご挨拶して」

「パパア」

いつも嫌みの様に『殿下』としか呼ばなかったローレンが自分の名前を呼び、少女に挨拶を促す。それだけでも驚いたが、少女はローレンを『パパ』と言う。こんな大きな娘がいたなんて初めて知ったと、目眩がしそうな感覚をヴラディーミルは感じていた。

ローレンはローレンでパーシャの行動に驚いていた。昼間、他の使用人達に会わせた時にこのような反応はしていなかった。顔を明らめ、ヴラディーミルに視線を合わせようとしない。

これからこの屋敷に置いて貰いたいと願う前に印象を悪くしないだろうかとヴラディーミルを伺うと、青い顔で口元をひきつらせていた。

「いつからだ」

「は？」

「いつから彼女の事を隠していた」

「いつからというと、昨日ですが」

「そんな大きな娘が昨日今日出来るわけないだろ。私に隠して子供を作っていたとは、悲しい」

「作っていたって、殿下、誤解です。パーシャは」

ローレンを見つめる娘の目が気になった。

彼女の耳を両手でふさぎ、できるだけ音を遮る。

それでも多少は聞こえるだろうが、自分の咎は軽症だ。

「パーシャは昨日庭で保護した子供です」

「そんな人間を犬猫みたいに、捨てるわけないだろ。嘘をつくならもっと上手くつけば良いのに」

本題を始める前に屋敷の主は思いつきり反れた誤解を始めた。し

かも、誤解した内容に腹を立てローレンの話を聞こうとはしない。

「お言葉なのですがディーマ様。彼女はローレン様が昨日、お庭で保護されたのですよ」

寝室からこちらをうかがっていたエリンはローレンに助け船をだす。

「エリン様」

パーシャの横に屈み、両肩を押しすように支えてヴラディールからよく見えるように対峙させる。

「ほらご覧くださいな。瞳の色も髪の色もローレン様には何一つ似ていませんわ。どちらかと言えば、彼女の髪の色はディーマ様と同じ。金色の瞳はどなたなのでしょうね」エリンの瞳には怒気が隠れていた。その目が訴えている内容を二人は察して冷や汗をかく。

「私には隠し子は居ない」ヴラディールは夫人の誤解を解くために真実を語るうとするが、誤解を打ち消すよりも、更に深めてしまいう弱々しい言葉しか吐き出せない。

「　という状況ですよ。お分かりになりました？」そう言っただけでエリンは悪戯っ子の様に笑った。

「ほら、ローレン様。お話を」

「あ、はあ。ということ、庭に遺棄されていた様で。今ヴィオロンが身元を確認中です。この様に私を頼りにしていますし、本来ならば許可されないと分かっています」

「許可するしないの問題じゃない。お前が必要ならば置いてやれ」
「構わないのですか？」

「女の子の一人増えた所で何が問題なんだ。なあパーシャもパパと居たいだろ」

突然自分の名前を呼ばれてパーシャは驚き、ローレンに隠れる。

何か言いたげな表情で見つめる瞳にヴラディールが屈んで首を傾げると小さい声で「お腹大丈夫？」と呟く様に伝えた。

ヴラディールは驚き、思い出したかのように手を当てる。

「気がついてたか。大丈夫。だけど、パパには内緒だ」

ローレンに聞こえないようにパーシャの耳元でこっそり秘密事を伝えた。

屋敷の主の許可がおりたため、用事が済み。堂々とできるようになった親子が廊下を歩く。

「パパア。あの人だあれ？」

繫いだ手を汗が滲むほど握りしめ、下から見上げてパーシャが問う。

「この国の王子。ヴラディーミル様だよ」

「おうじさま」

意味がわかっていているのかいないのか、彼女は繰り返すように呟く。「さっき何を話してた？」

ヴラディーミルがこっそりパーシャに話しかけた内容はローレンは知らない。あの王子様が女の子に酷いことを言つとは思えないが、保護者として認められた以上、気になる事である。

「内緒」

にっこり笑顔で、見上げて言う姿に、大丈夫だと確信して、気になる内容を追求するのは止めた。

ある天気のとてもいい日。

秋風が強くなつてくるはずの季節にもかかわらず、最近春の初めのようなやわらかい日差しが続き庭で散歩するのも軽装ですむいここちの良い日が続く。だが、ヴラデーミルのスーツの埃が気になつて、気になつて、しょうがないローレンは主人が居ない部屋でスーツにブラシをかける。外の気候など関係ない。

そんなものはフットマンにお任せ下さいとヴィオロンは言うけれど、任せていて満足できない仕上がりなのだから自分がするしかない。

ヴラデーミルは最近よく出かける。

昨日も、その前も留守にしていた。

当然本人は仕事だと言っていたが、あんな王子がなんの仕事をしているのだらうと疑問に思う。

王ならば、たとえお飾りでさえ、王座に座っている時間は屋敷を留守にするだらう。王座では国の行く末を色々悩むだらうし、面会者と会話もしなければならぬ。

現王は戦争屋なため、机上戦略でも練っているかもしれない。だが、王子なんていうのは、市民の血税で暇な時間をどうやって潰すか悩んで、自宅に閉じ込められるハズだ。とローレンは偏見を持っているため、ヴラデーミルが忙しくしているのが不思議でならなかった。

ブラシをかけたして気になつたことと言えば。

二日以上留守にしたあとはスーツには必ず傷や埃まみれになつている。上着が裂けていることもしばしば。

中身は普段通り横柄な態度は何も変わらず、パーシャに向けては、へらへらしている姿は怪我している様には使用人達には見えないし、

手当てをしたと言うものも居ない。ヴラディミールが乱暴なのだろうと結論づけ、クロークにある傷んだスーツを新しい物と取り替える。傷んでいたり埃まみれになっていてもハンガーにかけクロークにいれている辺りから全く気にしていない事は良く分かる。ただし、これは屋敷の主人がしたことか、フットマンが手を抜いたのか判断はつかないが。

傷んだスーツは軽症ならばエリンが補正してくれるため、真新しい物を何着も購入する必要はない。屋敷の財産の管理をさせられている身としては費用が浮いて大助かりだ。ただ、悩ましいのはいくら裁縫が得意であっても、女主人にそんな作業をさせても良いものかと思うが。

「あら、今日は一着だけですのね」

ローレンが持ってきた上着を残念そうに広げて見せる。

「そんなに何枚も破られては困ります。それに エリン様に」

「また言われるのですか、旦那様のお洋服は妻が縫うものですわ。それくらいしかディーマ様に出来ませんが、それさえもお邪魔されませんか？」

毎回補正の依頼をするたびに繰り返されるやり取りに、うんざりしたエリンは上着をたんでダンスの中にしまいこむ。旦那のために尽くしたいと言う気持ちは分からなくも無いのだが、「おかしい」と一言言いたいのだ。

「ローレン様はお考えがヴィオロン様とそっくりですね」

エリンが言うように、最近のローレンは昔のヴィオロンとそっくりになってきたように自分でも思う。

ヴィオロンに教えられた常識が常識なのだから、仕方がない。

「使用人に」「女主人の言葉が引掛かったので、注意しようと口を開くと「様をつける必要はありません」と先に相手が、眉をひそめて言った。

自分の真似をしている姿に同じように眉をひそめる。

「お分かりになられてるのなら、お気をつけ下さい」

「分かってはいますのよ。でも、お二方ともデーマ様のご友人ですもの。失礼ですから」

「私は友人などではありませんのでお気になさらず」

以前ヴェーラにも同じことを言われて否定したが、何処をどう見れば友人に見えるのだろうかと思む。

「そういえばローレン様。ご相談がありますのよ」

話を無理やり終わらすようにエリンが話題を変えた。本当はもう少し言わなければならぬことがあるのだが、今の彼女は何を聞いても通り抜けるだけなので、無駄な労力を惜しむ事にした。

「何でしょう？」

「お食事にワインを飲まなくて問題ないマナーは無いでしょうか」

質問された内容の意図が解らず首を傾げる。

「ワインですか？別に飲みたくなければお出しませんが、飲まない事はマナー違反でもないですよ」

ローレンはアルコールが不得意だ。何が上手いのかは分かりかねる味に、気分が悪くなる匂い。無理をして摂ると身体中を悪寒が走り立っていらなくなる。初めて飲んだ時に比べたら、強くはなかったが好んで飲む物ではない。

「私だけではなくて、デーマ様も一緒にしなければならぬよ
うな　ね」

「殿下は食事時にアルコールが無いと暴れますよ」

雪がよく降り、世界が凍結しているポーランの人間が酒を摂るのは、体を暖めるという習性に近い。王族は浴びる様に飲んでいるのをローレンは昔見かけた事がある。自分とは違い耐性がとんでもなくあるのだろう。

ヴラディーミルも王子だけあって酒は強い、と、言うよりも酒を置いてないと回答しただけで暴れるぐらい好物だ。

エリンが聞きたがっている飲んではいけないのがマナーであれば、マナー違反だろうが酒を要求するに違いない。

「でしたら、私も飲まなければなりません」

「はあ」

妻が夫に追従する必要はないと思うのだが、彼女は健気にも主人と同じように過ごしたいらしい。「あるいはエリン様が飲まないでと言われれば、気を使われるのでは？」

「滅相もないです。暴れるほど好きな物をお止めするなんて」

飲みたくないが、相手に気を使わせたくなって飲むという選択肢しかない。だから、飲んではいけないというルールは無いものか？とは、どれだけ都合のいいマナーなのだろう。

ただ、アルコールが好ましくないのに、飲まなければならない辛さは良く分かる。苦手な酒を相手に気を使わせないように美味しく飲む方法があれば解決だ。

ローレンは、何とか出来ないかと頭を悩ませた。

「ヴィオロン 相談があるのだが」

夕食用の食前酒を用意するため、ワイン庫で漉引き作業真っ最中のヴィオロンの動作を眺めながら声をかける。

「何でしょう？」

邪険にもせずに作業の手を止めてローレンに返事を返す。

「実は、エリン様はワインが苦手なのだ。かといって殿下の手前飲まないわけには行かない」

あんな王子ほおっておいて好きなようにすれば良いのだと誰もが思うが、主人が相談をしてきたからには簡単に結論は出せない。

「女性に多いですね、そういう方。アイスワインならいけませんでしたが」

代替案を提供すると、ローレンは表情に疑問を浮かべる。

「アイスワイン？冷たい ワインのことか？」

そう言っつて小樽からデカンタにワインを静かに移す。

むせかえる様なアルコールの香りがローレンを襲い、息を軽く止めて小樽に栓をした。

「ワインは冷やして飲むものじゃありません、渋みがさらに増して

しまいます。このポーランでは、醸造の前に果実が凍ってしまいます。その凍った果実で作られたワインをアイスワインと私たちは呼びます。凍ったままの果実で作ると普通よりも甘くなるのですよ。それでも苦手なものでしたら、澱引き前のワインがよろしいかも知れませんね」

「澱引き前というと」

デカンタを見てローレンは言う。先ほど樽から入れたばかりのそれは、よく見ると沈殿物が下に溜まり二層の液体が出来上がっていた。

この上澄みの液体のみを主人達に提供するのだ。

「これよりももっと濁っていますよ。適頃なものにはすでに卵白が入ってますから、保存樽のはすべて終了しています。澱引きなしで飲むのは想定していませんでした。申し訳ありません」

ヴィオロンが正しく業務をこなした結果、望んだものが無くなってしまった事を謝罪する。

「いや 想定外の事なのだから仕方ないだろう」

悪いのはそつ無く仕事をしているヴィオロンではない。謝罪されて困る。

「飲む意外に他は何か案はないか」

『飲まなくていい』提案は無いのかと聞いてみるが、ヴィオロンの頭の中には『飲まない』案は無いらしく「後は、口当たりを変えてみるのもいいかもしれません」と笑顔で答えた。

「口当たり」

口当たりを変えらると言っても、アルコール特有の酸っぱさと苦さは変更できないだろうと表情にだす。そんなローレンが小樽からうつしたデカンタのワインと似た色の瓶を持ってくる。

「匂いの少ないワインに果汁を添加すると、香りと甘さが追加されます」

瓶の中身は果汁である。果肉と皮を取り除いて飲みやすく作ったものだ。

幼いお客様用に揃えてあるそれは、最近は一パーシヤのために開ける事もあった。

「ワインやアルコールが苦手だという方はアルコールの後味が苦手な方が多い様です。成分は変わらなくとも後味さえ調整すれば飲める方は増えますね」

成分を合わせるのが前提なので、すべてのワインに対応できる訳ではないとヴィオロンは言う。

ワインセラーには沢山の樽が積んであり、どの樽に何の酒が在るのかローレンは理解していない。そもそも、いくつあるのだろうとそんな問題だ。

「ですが、果たしてお食事と合うとは限りませんが」

そう言うってヴィオロンはため息をつく。この作業は彼にとって不本意なのだろう。

「それはおいおい考えよう」

飲み物はひとつ前の食している味、舌触り、感覚を洗い流し新しいメニュー独自の味を楽しめる。

不得意な飲み物が美味しくなれば、食事の時間は苦痛ではない。

ただ、飲み物にも味があり。流した後味はどうしても口内に残る。

よい使用人は食事の内容を壊さないように飲み物を選ぶのだが、今回の様な混ぜ物は選択肢にない。

選んだものが恥じとならぬよう、祈りデカントにワインレーベルをかけた。

広い食堂に大きな食卓。上座の席に屋敷の主と妻が向かい合わせてに座る。毒味された食事と管理された薬味をヴィオロンから渡されるとローレンが配膳を行う。

主人の前にはいつものワイン、エリンの前には混ぜ物のワインを注ぐと、エリンにだけ聞こえるように「お口に合うとよろしいのですが」と呟いた。ヴラディーミルに気づかれないように視線はグラスと注ぐデカントから外さない。

いつもの様にグラスに淡い黄色を染めると、注ぎ口をナプキンでふき取り栓をする。注ぐ前に外したレーベルをかけるとヴラデーミルの後方へ回る。

呟かれた言葉を疑問に思いながらワインを口に含むとエリンは両目を見開いてローレンを見た。驚いて口が開いたのをヴラデーミルに気づかれないように口元に右手を添えて隠す。

ローレンは主人に気づかれないように一礼するとエリンだけに注いだデカントを下げた。

「今日は機嫌が良いですね」

普段と様子の違う妻にヴラデーミルは疑問に思い、いつもと違う言葉をかけた。

「いつもと同じですわ。あ、違うとすれば、お料理がとても美味しいのです」

夫の言葉に食事をする手を止めてエリンは笑顔で答えた。

「そう　ですか？」

いつもと変わらないようなとヴラデーミルは首をかしげ、料理の味を確かめるようにゆっくり咀嚼した。

「あれはワインでしたの？嫌な味がしませんでしたわ」

ヴラデーミルが退席し、一人になったエリンがローレンにたずねる。

「ワインで間違いないですよ。まあ正式にはワインというより、果実酒の方が正しいのですが、意味はどちらも同じです」

ヴィオロンの思惑どおり、口当たりを変えた事で彼女は満足したらしい。

「お食事に合わないかも知れませんが、今後ご用意しましょうか」

ローレンの提案にエリンは笑顔で頷いた。

エリンのために、果実を添加されたワインの残りを執事室でグラスに入れる。

混ぜてしまうと品質が落ちてしまい味が悪くなってしまったため、処分しているのだ。処分と言っても捨てるのは勿体無いため飲みきってしまうのだが、混ぜり物のワインは誰も見向きもしないため、ローレン自ら飲んでいたのである。

嫌々飲み始めたワインだが、匂いを裏切らない甘い味とほんのり舌に残る酸味がローレンを虜にしはじめた。

苦味が全くなく、果実飲料その物だ。ただほんのりとしたアルコールが喉をチリチリ焼き、体温を上げる。

「確かに　これだったら問題ないな」

幸せそうにワインを飲むと足元にパーシャが現れた。

「パパがテイ以外飲んでるのはじめて見るの、何？」

「ワインだよ」

「わいんやだあって言っただけだった？」

「よく知ってるな」

以前会話の中でワインが苦手だと誰かに言ったことがある。勿論、彼女の言うような拒絶のしかたをした訳ではないが、意味をちゃんと理解して人の言葉を聞いている事に感心する。

「今日の頭はふわふわしてるな」

頭を撫でようとすると、いつもとヘアースタイルが違うことに気がつき訪ねてみると「嫌い？ヴェーラにしてみらったの」と問い返されてしまった。

その言葉にローレンは首をふり、いつもと同じように頭を撫でると、満足そうになっこりした。

「ヴェーラは魔法使いだな」

パーシャがかわいらしいのは良いことだ。

「簡単なのよ」

こうやってと髪を小さくとり、三股に分けると編み込み始める。

どうやら、昨夜に小さなみつあみをたくさんして、髪にウェーブをかけたらしい。頭に置いた手を離すと、抑えられた髪の毛がスプリングのようにはね、緩くかかったウェーブがふわふわ広がる。

「パパは褒めてくれるの。ありがとう」

「誰も褒めてくれなかったの？」

「一人褒めてもらえなかったの。でもいいの」

そういえば今日はダヴィードにパーシャを預けていた。東館では誰かがパーシャのご機嫌を損ねたらしい。

「僕は、パパが喜んでくれたら嬉しいの」

パーシャは自分のことを『僕』と言う癖が抜けない。ヴェーライわくローレンの真似をして覚えたらいいのだが、女の子なのだから他の人に見られたら驚かれることだろう。

「パーシャ。女の子なんだから自分のことは僕じゃなくて、私って言わなきゃ」

いつものように注意する。

言葉尻はとても優しく、甘やかすように。

「はい」

優しいパパの注意を受けて、パーシャは素直に返事はするのだ。

だが、未だに直っていないのは素直なのは返事だけである。

ヴィオロンに注意される前に何とかしようと思っただけで、酔い気分の中考えるローレンだった。

予定外な事が起こっていた。

いや、単純にローレンの計算違いだと言われれば終わってしまう話なのだ。

アルコールが苦手な女主人が問題なく食事時にワインを飲むための果汁が底をついている。

対処方として今日はワインではなくて水で食事をとってもらおうと相談してきた先に、留守のハズの主人が座っていたのだ。

「殿下。今日はお帰りにならないのでは」

驚いてそう言うと、ヴラデーミルは機嫌を悪くした様で仏頂面をこちらに向けると「あいにく、予定が変更になってな」と返事を返した。

主人の機嫌を損ねたのは全く問題ないが、主人が帰宅していれば、夫人に水を進めても首を縦に振らないだろう。そうになると、今夜の分は確実に確保してこななければならない。

「明日は食事はこちらで？」

夕餉の時間には出かけないのかと希望をこめて確認してみる。

「私が居ると不都合なのか」

「いえ」

不都合ですと言いたい気持ちを抑え、主人の質問を否定する。原因はヴラデーミルであつても直接的には何も関係ない。

必要以上に尋ねる態度が野生の勘に感づかれた様だ。歩くローレンの後ろを付きまとうようについてくる。

「業務の邪魔なので、お部屋におもどりください」

当然のように部屋に入ろうとする姿を制し追い返そうとするが、全く効果がない。

「ちゃんとお前が仕事をしてるのか監視してるんだ」拳句の果てに

この台詞である。

ローレンに続き、執務室に入り込むと、日の当たる窓際に椅子を移動させ座る。

その場所はローレンの背後に当たり、監視をするには丁度良い場所ではある。ヴラデーミルが大人しくそこに座っているとは思えないため、どうやって追い出そうかと要らないことに頭を使うことになる。

「ローレン様よろしいでしょうか」

そんな中、来客の声が室内にかかる。

「どうぞ」

返事を返すと、メイドが入ってきた。

「君は？」声を聞いたことのない彼女は姿を見ても思い出さない、初めて会う相手にローレンは質問する。

「メイドのジルと申します。本日参りましたのは、お願いがございました」

彼女はそんなローレンの質問に答えると、自分の用件を続けた。本当は彼女の願いなど聞いている余裕は無いのだが、ワザワザ訪ねて来たのを追い返す礼儀は知らない。それに他所で耳にしたり、目にした『ジル』という名が気を止めた。

「どうされました」

「実はセラーに保管してある果汁を分けていただけませんか」

頭を下げたまま、彼女はローレンにとってとんでもないことを言う。

「無理ですね」

無論依頼は成就することはできない。

「どうしてでしょうか。私ごとには分ける物は無いと？」

「いや、そうでは無くて。余裕があれば分けることはできる。あいにく在庫がないんだ」

頭ごなしに無理と言われ口調の尖った相手に現状を説明すると、ジルはびっくりした目をした。

「はあ？ あなた、消費量も予測してないんですか。執事でしたらそれくらいこなして当たり前かと思ってましたけど、他部署ならともかく、自己管理してるセラールで欠品を出すなんて、失格ですね」「調達は検討中だ。君こそ、普段必要の無い果汁を求めるのには僕と似通った理由があるんじゃないのか」

ローレンは気が短い。彼女の言葉に少し腹を立て、言い返す。

彼女は顔を真っ赤にして「あなたと一緒にしないでください」と怒鳴る。ムキになるのは肯定と思われた。

そして、聞き取れない声でぶつぶつと呟くと、頭を下げ出ていった。

扉は乱暴に閉められる。

「ふうん。果汁が足りないのか」

ジルとローレンのやり取りを空気に様に見守っていたヴラディールはニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

「先程も言いました様に調達は思案中です。ご心配なさらずに」
来客の事しか頭になかった一瞬で、窓際の主人を忘れていたローレンは隠していた失敗を自ら暴露してしまった事に青ざめる。

「しかし 果汁なんて何に使うんだ？」

ヴラディールは気づかなくていい事に疑問を抱く。

「パーシャが飲むですよ」

夫に気を使うエリンのために必要だとは、その夫に言うわけにもいかず、別の理由を言い訳にした。因みにパーシャがあれば飲む時もあるが、甘い果汁が邪魔をして食事の味を上手く伝えられない事をヴェーラから聞いて食事時は基本は水である。このように保護者を困らせたりしない。

「いや、ジルだよ」

「それは存じません」

先程の態度を思いだし、愛想の無い口調で返す。

自分でも失敗したと自覚しており、対処する前に失格と責め立てられた事が無駄に彼の自尊心をえぐったため、彼女の印象はかなり

悪い。

「彼女が困ってるんだ。ローレンなんとかしてやれ」

素敵な屋敷の主はメイドにさえジェントルマンらしい。何故、彼女の為に調達してやらなければならぬのかとやる気の無い思いが「はあ」とローレンの口から漏れる。

「屋敷内で手に入れるとすれば果実から絞るしかないだろうな。本来ならばジルに頼むのだが、その彼女が求めてるとなると」

「果実なら彼女に頼まずとも厨房にあるでしょう」

葡萄やオレンジを厨房に納品した伝票を見たのを思い出す。あれはいつの日付であったかまでは記憶に残っていないが、入れたと言う事は少なくとも果実が有る可能性はある。

「厨房に ないだろ」

ヴラディーミルは少し考えて、無いと判断する。

「交渉はしてみます」

ローレンの思考には、ヴラディーミルの結論を参考にすることは無い。

「まあ、手に入らないだろうが後で報告に来い」

先程の様に付きまとうていついてくると考えていたローレンは拍子抜けである。

何を持って無いと決めつけているのかは分からないが、邪魔なヴラディーミルがついてこないだけで良しとした。

厨房の場所はわかっていたが、来訪するのは初めてである。用事があれば一度ジャムを作った料理人と話してみたいと思っていたからだ。厨房以外にも場所は分かっているのにローレンが足を踏み入れている場所が多くあるが、パーシャの様に探検しようとは全く思わない。むしろ、縁が無ければ近寄りたくも無かった。

踏み入れたことのない領域を歩くと、会ったことのない使用人達が警戒して見ている事は目に染みてわかる。

他人の視線は何故だか痛い。

それは、昔も今もあまり変わらない。

厨房は昼だと言うのに真っ暗で人の気配が感じられなかった。中に踏み入れると人の気配処ではなく、料理を作っていた形跡がない。色んな物が埃を被り、床には自分が着けたと思われる足跡が入り口から延びている。こういう清掃がきつちりされていない場所では菌の繁殖が恐ろしい所だが、カビの匂いがしないし目に見えて生えているものが見当たらない事から、食材も放置されているわけではなさそうだ。

ここは使用されていないのだ。

目の前の状況からそう判断はするものの、昨日もちゃんと食事が運ばれてきたのは確認し自分もそれを食べた。目の前の環境はそれさえも記憶違いだったかと思うほどに荒れていた。

ヴラディーミルが『無い』と断言するのわからないではない。

「無いと言うよりは、存在しない　だな」
ふつと一息吐き出すと、知らぬ間に袖口に積もった埃が白い煙と なって吹き飛ばされた。

眉をひそめるローレンの後ろに、一回り小さな人影が潜んでいる。埃に氣とられて気づかぬローレンに近寄ると、人影は後頭部を殴り付けた。

「残念だったね、泥棒さん」

一撃が彼の意識を奪うと、相手は低い声でそう言った。

ローレンが意識を喪失していたのはほんの少しの時間。その時間であっても相手には十分であった。

打撃された後頭部はしつかり痛んでいて、頭を動かすと突き刺さるように痛みが走る。無意識に痛い部分を押さえようとすると拘束されている両手が確認できた。

「泥棒じゃなくて、この方は屋敷の方ですよ」

「つまみ食い、食材横領、器材転売、屋敷の内部の人間だって泥棒

には違いないさ。しかも性質が悪い」

「ですが」

頭の上で男女の声が聞こえる。どうやら自分の事を泥棒だと話し込んでいるらしい。

「そんな品の悪い方には見えませんが」

上半身は起こす事ができたため、なけなしの腹筋を酷似し上肢を起こす。

メイドと白衣の二人が話し合っていた。

「使用人だったら腐っても貴族の坊っちゃんだろ、品はたーぷりあるさ。あ、目が覚めたか」

「状況を説明してもらえないか？」話し合っている二人に声をかけた。

「ひゃあっ」

メイドがローレンが声を出したことで怯えるように、白衣の人間の後ろに隠れる。

「手は縛りつけてあるんだから、暴れやしないよ」

隠れたメイドに声をかけ、ローレンの方へ向き直ると、低い声を更に低くして「状況をつて余裕だね」と笑う。

「怯えるようなやましいことは無いからな。キッチンと図面上指定してある位置に行ったら廃墟だったのは覚えてるが」

周りを見回すと先程の廃墟ではない。

燃える暖炉に煤けた鍋がかけられ、水槽に置かれた水桶に清潔な水が張られ野菜が浸けられている。厨房と想定できる風景だ。

先程の廃墟が幻で、現実はこちらだったのかと痛む頭を悩ませた。

「見た所、屋敷の使用人だろうけど、キッチンに用事のある男性使用人は居ないんだよ」

白衣の相手は長い棒をローレンに突きつけると上から怒鳴り付けた。

「で、泥棒と認定された訳か」淡々と状況を確認する。

「そうだね」怖がったり、焦った表情を見ることができない相手は

つまらなそうに返事をする。

「僕はちゃんとした理由があつてキッチンに来た」

「なにさ」

「それは言えない」

失態を知る人間はごく少数で構わない。得体の知れない二人に教える必要は無かつた。

「馬鹿にされてるのか俺等は」

「君達は僕が泥棒と考えている。それは僕を何者なのか分かっていないからだと思う。ただ、僕も君らが何者なのかは全く知らない。

知らないからどこまで説明していいのかも把握できない。よつて説明はしない」

武器(?) を持っている相手を煽つて無事に済むとは思えなかつたが、先日のような衣装を用意した外部の者も居る可能性は無い。問者は男性より女性の方が多いと聞くしメイド服を着ていたとしても内部の人間とは確証できない。ただ、ここが厨房であるのは間違いなく、この場所で部外者の自分を泥棒と警戒していることから外部の人間ではないと想定はしていたが、あくまでもローレンの想定内であるため言葉の確証が欲しいと思つていた。

「私は、キッチンメイドのルーダと申します。ここはファーストコックのキラ様の管理キッチンです」

隠れていたメイドが二人の間の割つて入り、自分の身分と場所の説明をローレンにする。

「ルーダ。何丁寧に説明してんのさ」

白衣がメイドに怒鳴ると「確かにおっしやる通りなのですものと身をすくめた。

「ありがとうルーダ。僕はローレン」

「あのローレン様ですの」

彼女の言葉に視線をそらす。

「君も名前だけは知つているんだね」

兵器を作つた男の息子として軽蔑されるのだらうとそらした視線

はそのまま床へ。

「だれなんだローレン様って、聞いたことない」

「ヴラディーミル様の大切な方だって噂の執事様ですよ」

「あー。王子の恋人か」

想像していた言葉と全く違う言葉を二人は認識しあった。

「は？」

驚きのあまり声が漏れる。

「違うのか」

「違う。断じてそんな事は無い。殿下はちゃんと奥方も居られるし僕に男色の趣味はない」

「とんでもない勘違いだと痛む頭など気にせず首を振り、全力で否定した。」

「なんだ面白くない」

「真実であつたとしても面白くなどない。お二人に失礼だろ」

エリンは間違いなくあの王子に好意を持っている、メイド達の勘違いが耳に入る事はあまり好ましいとは思えない。誤解され、夫人に嫌われて解職される事は困らないが、解職されず勤務をこなす方が色々と気まずい。

「こいつが失礼なのは認めるが、あんたも失礼なままで居るのかい？ 俺らは自分の所在を明らかにしたよ」

自分たちの想像が叶わなかったのが残念なのか、見るからに肩を落としているルーダの横で白衣の人物はローレンに再度の問いかけをする。

「あ、そうだな。その、コックは居ないのか？」

「この服が見えないのか、俺がキラだよ」

確かに白衣はコックの証だ。ただあの繊細な料理を目の前の人物が作っているとは全く結び付かない。

「あの綺麗な料理を作っているのはあんたなのか」

「つくづく失礼な奴だね」

「キラ様、きつとローレン様は褒めているのですよ。素直に受け取

りましょうよ」

「いや、信じられなくて」

メイドが気を利かせた言葉もローレンは台無しにしコックを怒らせた。

「ほら、馬鹿にしてるだろ。ルーダ。チーズをだせ。貝に使うからほんの少し、外皮はいらない」

メイドに指示を出すと自分は奥から貝を持つてくる。指示を受けたメイドは太めのナイフでチーズを切ると外皮部分を削り、慣れた手つきでスライスし始めた。

キラはその間に貝から大きな貝柱を取り出し、クロスで包む。

フライパンの上にスライスしたチーズを敷き、溶け出すとクロスで包んだ貝柱を乗せ両面を軽く焼いた。

ルーダが持つてきた白い楕円形の皿にそれらを載せると空いたフライパンに取り除いた貝殻を並べオリーブオイルをかける。軽く火を通し、貝殻を取り除くと、残ったものに粉状の何かを混ぜる。出来上がったソースをまるで絵を描くようにかけると空いたスペースに貝殻を置き赤と緑の小さな葉を置いた。

ローレンがぼんやりしている間に簡単な料理が出来上がった。

食す部分は少ないけれど、白の貝に軽く焦げたチーズの淡い色を囲むように、緑色のオイルと置かれた赤と青緑の葉が鮮やかでとても綺麗な作品が差し出された。それはいつも配膳している食事を目の前の人物が作っているという証拠である。

「大変失礼しました。確かにあなたの方が料理を作られている」

短時間でこんなに綺麗なものを作り上げた腕に敬服し、失礼な態度をわびた。

「大人気ないですけどね」

満足したコックの前でいたずらっ子のように笑い、こっそりローレンに耳打ちする。

「緑色のソースにはオリーブオイルに何を入れたんだ？」

工程を見ていた中で、ソースの原料だけが理解できなかったため

製作者に質問をする。

「アーモンドと岩塩をこのルーダが粉末にしたものだよ」

「アーモンドでこんな鮮やかな緑にならないと思うが」

粉上の何かは、塩と木の実の粉末だという。双方からこの色が生み出されるとは到底思えないため疑問の声を上げた。

「それは、ハーブとレモンの皮を混ぜ込んでるからです」それは自分の仕事だといわんばかりに手を上げてルーダがローレンの疑問を解いた。

「なるほど 酸味のある匂いはレモンの皮か」

想像していなかった果実の名前にここで果汁が手に入ると内心ほっとする。だがレモンの果汁ではワインと合わせる事は出来ない。

「ローレン様。ではキラ様に何故こちらにいらっしやったのかお伝え願えますか、納得していただけないと拘束を解除差し上げることができませんから」

仲良く話しはしているが、ローレンはまだ泥棒の嫌疑をかけられていて、腕は拘束されたまま。

「実はワインに風味が足りないときに果汁を混ぜているのだが」
伝えなければ物には手に入らない。手にいれるためには正直に話しかない。

だが、失敗談を話すのには躊躇した。今、目の前でしれっと素晴らしい料理を作ったコックにならなさらだ。

「で？」

とまってしまった言葉の続きを促すようにキラが言う。

「最近の使用量が増え、必要な果汁を切らしてしまい。果実を分けていただくかと」

視線をそらしたまま恥ずかしそうに答えるローレンの言葉にキラは目を丸くして一瞬固まり、直ぐに噴出すように笑う。

「あは だっさあ。執事失格だね」

管理がちゃんとできていないのだから、失格と言われても仕方がないのだがキラはそこをバカにしているのではなかった。

「執事様みずから果実から果汁を取り出す作業をするんだ」吹き出す様に笑いだし、そして止まらない。

隣に居るルーダが、オロオロしだす。ローレンは何とも思っていないが、上位使用人の前で大笑いするコックの態度は失礼だと怯えているのだ。

「あー笑った。笑った。残念だけど、ここにはワインに使える果実は無いね」

「葡萄を納品した事はあるはずなのだが」

「過去に魚のソースに使ったかも知れないけど、基本は木の実やハーブで足りるからね。デザートやジャムを作ってるメイドなら在庫あるかも知れないけれど、厨房には今は無い」

「ジャムはコックが作ってるんじゃないのか」

「当たり前疑問を相手にぶつけると、コックは馬鹿にしたように笑った。」

「なんにも知らないおぼっちゃまなんだね。コックは料理しか作らないの、甘味はメイドたちが作ってる。まあ俺もメイドの誰かまでは興味ないから知らないけどね」

「ジャムが甘味に入るのかは分からないが、彼女は製造に参与していないらしい。」

「そうか」「少々残念そうに、ローレンが呟く。

果実が手に入らない事だけではなく、あの素晴らしいジャムを作っている人間が誰か分からない事も含め残念な結果となってしまうた。

「ローレン様にそんな事を言いましたか、そのコックは解雇にしましょう。貴方はその権限をもっていますから」

ヴィオロンが肩を怒らせて言う。

図面上の厨房ではなく、本来のキッチンから帰ってきてヴィオロンを捕まえた。

別に告げ口をするつもりはなかったが、食べ物すべてはコックが関わっていると誤解していた事実と、本来は誰が作っているのかという新たな疑問を解決しておきたくて軽く聞いてみた。ただ、聞き方が悪かったらしく、「と言われたのだ」とヴィオロンにそのまま解説したことで、結果告げ口となってしまった。

「あのような綺麗な料理は簡単にはできないだろ。そんな事ぐらいでクビにしていたら、ダヴィードは何回クビになるんだ」

「ダヴィードが失礼な事を？」

ヴィオロンがジロリとローレンを見る。

「あ、いや。口調だの身だしなみの問題だ。彼はよくやってくれると 思う」

「確かに問題ですね、矯正させましょう」

解雇から矯正へと話の方向がずれたとホツとし言葉を考えるよう心がけた。自分の一言で使用人達の解雇が決まるとなると、これから発言は気を付けなければならない。

ダヴィードはとんだとばっちりである。

「ジャムはジルが管理しています」

「ジル」

聞き覚えのある名前を繰り返す。

「以前ご説明したと思いますが、ハウスキーパーですよ」

「彼女がジャムの製造に参与しているのか。あ」

態度の悪いと続けようとして止める。先ほどと同じように今日あ

った出来事を報告し、彼女の立場を悪くしかねないからだ。

よく考えれば、ダヴィードといい。コックといい。あのジルというハウスキーパーといい。この屋敷には横柄な使用人ばかり雇われている。

それは自分も同じかとヴラディーミルを忘れていたことを思い出した。

ルーダとキラの噂話を思い出して、体全体が行くのを拒絶したが戦利品が何もない以上「来い」と言われた案が何かを伺いたい。嫌々ながら部屋に入る。

ヴラディーミルの部屋には着飾らたパーシャが嬉しそうに果汁を飲んでいた。

「パーシャ何故こんなところに？」

部屋の主に挨拶もせず、娘に声をかける。

「王子様がお出かけに連れて行ってくださったの」

パーシャは頬を赤らめて興奮した様子で笑顔をもらした。

「殿下についていったの？」

「ガラスのおうちがいっぱいあってね、お花が沢山ならんでたりね。お洋服がかざってあるの。皆キラキラしてるの」

パーシャの伝えたい内容から、どこかの街に連れて行ってもらったのだと想像する。キラキラしている辺りは裕福層の利用する店なのだろうか。

「どういうことでしょうか」

「厨房にはなかっただろ。ローレンに恥をかかせないように主自らが調達にいったのだ。だが、街に行くのに独りでは寂しい。お前を待っていてもいつまでたっても来ない。代わりにかわいい従者を連れて行ったと言うわけだ」

あとで来いというのは、このためかとローレンは顔をひきつらせた。

「殿下とパーシャだけで何かあったらどうするんですか」

毒気の無い笑顔で笑うヴラディーミルにたしなめるように言うと、

上着の裾をパーシャがひつぱる。

「大丈夫よパパ。ダヴィード様も居たのよ」

「ダヴィード　さま？」

パーシャに向けて首をかしげる。

「ええ。ダヴィード様」

可愛く顔の向きをを斜めに倒して笑顔を向ける。

「なぜダヴィードに『様』をつける？」

かわいい娘の口から不快な言葉を聞いたため確認する。

「皆そう呼んでるもの」

皆とは東館の使用人たちだろう、言葉ひとつずつは問題ない。足されて一つの言葉になった時に耳障りなのだ。特にパーシャが使うことがローレンには許しがたかった。

「他の方にはつけても、ダヴィードには要らない」

「ヤキモチかローレン。大人気ないなあ」

「誰が、誰にですか。大体、使用人に『様』は必要ないんです」

ついこの間、夫人に説教した内容を理由とする。

ヴラディーミルは何か言いたそうだったが、話を本題に戻し木箱に入った果汁の瓶をローレンに指差した。

その内一つを抜くとローレンに渡す。

「さて、麗しきメイド長に献上に上がるか」

飛びつきりの笑顔で上着を直した。

「ジル。果汁を持ってきました」

彼女の部屋は正しいキッチンの側にあった。部屋に陶器の皿を保管してある倉庫があるためである。用意された料理を盛り付けるための皿は彼女の許可が無いと使用することはできない。室内には他に果物庫への入り口もある。

入り口はそこにしか無く、信用された使用人のみが配置を許される場所だ。

麗しきとヴラディーミルが表現するように、彼女は見た目は若く、

ローレンとさほど変わらないように見えた。この若さで信頼を勝ち得ているのだから余程仕事ができるのだらう。

それとも只のヴラディールミルの趣味か　彼は利口な女性が好みである。

「あ　ヴラディールミル様。ありがとうございます」

驚きに見開かれた眼差しがヴラディールミルではなく、後ろから来たローレンに向けられた。差し出された瓶を両手で受けとると、視線を伏せて礼を言う。

「差し支えなければ何に使用されるか教えてほしいのですが、ローレンが聞けというので」

「僕はそんな事は言ってません」

真顔で嘘を吐く主人の後ろから、その内容を否定した。

「大変申し訳ありません。デザートに使用している庭の木苺の木が掘り起こされていて代用に何かでムースを作ろうと思ったのですが、合う果実が無くローレン様をお願いをと、ご迷惑をおかけしました」

「ジャム用に苗を育てられていましたね。それが？」

「そうです。それがほとんど。木苺は崩れやすいですから市場で熟した実を手に入れにくいのですので、ヴラディールミル様が作ってくださったのに」

「と言うことはジャムの在庫がなくなるのですか」

ジャムの話になるとローレンの顔色が変わる。

「幸いブラックベリーがまだ実をつけてない苗が無事でしたのでそれが実れば作れるかと」

「なら残りは死守しないと。ベリーなら鉢植えにして避難させましょうか」

「ですが」

ジルはヴラディールミルの提案に言葉を濁す。

「？」

「見ていただいてからご判断いただけますか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851w/>

子連れステュワードの縁由

2012年1月15日10時47分発行